
【キセキ = シリーズ】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【キセキシリーズ】

【Nコード】

N 6 1 3 2 Z

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

『不治の病』を患った吸血鬼の少年は、世界列車に乗って余命の旅に出ることにした。その足取りに捨てきれない迷いを滲ませながら。

『科学の街』製特殊部隊所属の少年は、日常的に対バンライブを行っていた。可も不可もない日々の安定を、少しも疑わないまま。

『神秘の体』を有する殺し屋の少年は、息苦しい世界で死に場所を求めていた。まるで、これまで何度もそれを試してきたかのように『殺しの罪』を背負った囚人の少年は、地図には載らない監獄の島

で生涯を収めようと決めていた。とある少女から現実逃避するためだけに。

それぞれの日常は境界の合図もなく壊れ始め、終焉の物語、その渦中へと吸い込まれて行く。

そして……

この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

???
(前書き)

この物語はモダンチック異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

???

あなたが軌跡を望むなら

歌はいつでも赤く集束して紡がれる

だって 私もソレを陰から望んでいたから

あなたが奇跡を祈るなら

唄はどこでも黒い理由で塗り潰される

だって 私もソレを裏から祈っていたから

あなたが輝石を願うなら

詩は誰からでも白き群像で惑わされる

だって 私もソレを闇から願っていたから

そして ここは ■ ■ ■ に至る物語

されど ご覧の通り 始まりではなく

だからと言って 終わりでもない

ただ ただ 過去と未来に直結した現在

なにしろ むしろ

真相を知るのは やっぱり

私と ■ ■ ■ だけなのだろうから

1 『赤い糸』の先に一筋の希望を願って

とくん、と。

左手の小指に微かな鼓動を感じた。

見ると、そこに燐光のように淡くて儚い輝きを放つ『赤い糸』がある。

幻覚にも似たその現象を目にし、少女は一瞬だけ呼吸を忘れるくらいに驚いた。

瞳を閉じて深呼吸。

瞼の裏に映る不完全な暗闇に身をゆだねると、胸が異常に高鳴っていることに気がついた。

高揚しているのか緊張しているのか、感情の置き場所さえ把握していないのに、自然と握る両手に力が入る。

その手のひらは妙に汗ばんでいた。

再び目を開けるのには、多少の時間が必要だった。

それは何も育まれていないがらんだ心の心より、まばらな勇気を一ヶ所に掻き集めるための時間だ。

瞼の奥に視認する広大な闇の中、星屑のように散らばる光を手当たり次第手元に寄せる。

そんなイメージで集まった灯は、少女の小さな両手に収まるくらいちつぽけなものだった。

それでも、彼女が自身の背を後押しするのに、十分な光量が宿っている。

——願わくは、今の『赤い糸』が幻想ではありませんように。懇願にも等しい想いを抱いて、少女は瞳をそつと開く。

——あった。

左手の小指。

その第一関節に一巻きだけ結びついた『赤い糸』。

それは生まれたばかりの赤ん坊みたいに、たどたどしい脈動を打ちながら少女の指先より虚空に浮遊し、どこかへと流れている。

糸が出現する条件や理屈は分らない。

だが、これまで不吉を象徴とする『黒い糸』ならば、度々発見していた。

覚えている限りでは一六回ほどだ。

その糸がどの方向に繋がっているのかを、『彼ら』に案内するのが彼女の役割だった。

もつとも、せっかく見えた『黒い糸』は、『彼ら』に教えると決まって数時間後に消失してしまう。

だから、『黒い糸』の意味を深く考えたことはない。

また考えてはいけない気がした。

しかし今回、唐突に現れたのは『赤い糸』。

そんな福音の象徴を目で追うのは初めての経験だった。

おそらく劣悪な生活環境のせいだろう。

成分不明の黒いシミがこびりつく灰色の壁と、壊れかけの豆電球。取ってつけたような洗面所。

天井近くに設けられている、空気を循環するには心もとない小さな鉄格子。

いわゆる独房と呼ばれる場所。

湿気と閉塞感ばかりを孕むこんな粗末な空間にいれば、温色を示す『赤い糸』を拝めない理論も頷けた。

なぜなら『彼女の右眼でしか可視できないその糸』は、彼女と他者を紡ぐ運命的な数字および『血』を素材としているからだ。

そういうルールである以上、『彼ら』に独房で管理されている少女が、外の世界の誰かと繋がるきっかけなど無に等しい。

『彼ら』の目的に沿って偶発的に目撃している『黒い糸』ならまだしも、本来なら赤など有り得ないはずだった。

なのに、こういう因果かこうして奇跡は起きた。

少女の細い小指に巻きつく糸の先には、彼女と『赤で結ばれるベ

き誰か』がいるのだ。

けれども今次、少女が見取った『赤い糸』はあまりにか細くて頼りない。

横から微風が掠めただけで切れてしまいそうだ。

その上、少女が我が目を疑うように糸を視線でなぞっているうちに、純粹な赤だった色は定期的な明滅を始め、徐々に黒に歩み寄る朱へと変色しつつある。

まるで彼女を急かすみたいに。

ふいに、少女は錯覚に襲われた。

重たい石が腹部に腕を伸ばして、しがみついてきたかのような感覚。

原因はきっと彼女の思考が、大きな逡巡に行き当たったせいだろう。

この小指に絡まる『赤い糸』の先を手繰り寄せたい、という葛藤。それはある種、成長の兆しなのかもしれない。

一〇年間、『糸を感知するための道具』として多くの時間を不衛生な独房で呼吸してきた彼女は、一度だって『彼ら』に逆らった例がない。

反旗を翻すという思想そのものに至らなかったのだ。

これが異常ではなく普通。

常識的な、極めて一般的な生活なのだと徹底的に調教され、少女は灰色の壁の向こう側に広がる世界に、さほど興味を抱けなかったゆえに、『何か行動を起こすにあたって、迷いや戸惑いが生じることもある』といった心理を、道具として生きていた少女が知るはずもなかった。

道具は利用されて当然。

むしろ誰かに使ってもらえなければ存在意義そのものが崩壊する。だとしたら行動することに疑問なんて感じている場合ではないのだ。

そう頭では理解しているのに、少女はどうしても慣れ親しんだ行

動を実行に移せなかった。

今すぐ『彼ら』を呼んで、黒ではなく赤が見えたことを報告しなければならぬのに、あたかも前触れもなく現れた『赤い糸』が、彼女の歪んだ常識を内側から打ち砕いたかのように、できない。

そう、少女はすでに決断しかけていた。

『ここから逃げて自由を手に入れよう』という結論を。

もちろん恐い気持ちも強かった。

逃げ切れる算段だつてない。

捕まった後のことを想像すると、やはり恐ろしくて足が震えてしまふ。

ここから逃亡したりすれば厳しい罰が待っていると、『彼ら』に実体験で教え込まれたせいだ。

恐怖に対抗するために要する勇気の量は、先程用意した分の比では到底足りない。

それに、たとえこの場を奇跡的に凌いだとしても、『彼ら』は地の果てまで追いかけてくるだろう。

無機質な壁の外に寄る辺ない少女には、勝算が少なかった。

この四角い世界で大人しくしていれば自由はないが、安全はある。待遇は悪いが、生きていられる。

下手なことをしない限り、恐い目や痛い目に遭遇することもない。そんな選択の前に佇んだ少女は浅く下唇を噛み、しばし利潤とリスクを天秤にかけた。

吟味した上で、決意した。

この『赤い糸』の先にいる、名前も顔も知らない誰かに会いに行くことを。

ふと、これが自由を手に入れるための、最後のチャンスのような気がした。

直感だ。

思い過ごしかもしれない。

だったら、それはそれで構わない。

どうせ後づけのような理由なのだから。
そうして。

生まれて初めて漠然とした自由に恋焦がれた少女は立ち上がり、
施錠部分が腐りかけている独房の扉と向かい合った。

一本道だった未来を自ら切り開くために。

『赤い糸』の先に一筋の希望を願って。

2 | 何かを期待している彼女の眼差しに、けれどハイクが答える声はなかった

目の前で数え切れないほどの群衆と化した人間が、巢に向かってせつせとエサを運ぶ働きアリみたいにごった返していた。

しかし、混雑の流れに秩序はなく、複雑な放射状を描いている。縦横無尽に際限なく入り乱れる人々の動きは、途切れる気配など微塵も垣間見せてくれない。

もしも人間と羽虫くらい極端に大きさに違いのある巨人が、この混沌とした群れを雲の上から見下ろしたら、無数の昆虫が蠢いているように気持ち悪く思ふのだろうか。

そんな取り留めもない皮肉を、ハイク「R」セカンドは胸の中だけで述懐した。

「参ったな。人混みは苦手だ」

眉間に不快混じりのシワを寄せながら、ほとんど唇を動かさずに独り言つ。

その囁きさえ自分の耳には届かずに周囲の雑踏に埋もれるのだから、ハイクが不服に顔をしかめるのも頷けた。

真昼の『世界鉄道』駅前是不慣れな者が歩くと、ものの一秒で他人と肩がぶつかる。

それほど多種多様な国籍が、駅構内の界限には行き交っているのだ。

彼らは一様に携帯端末やら小説やら音楽プレイヤーやら何やら、自ら視覚と聴覚を遮断して前方不注意な状態で進軍しているのに、まるで第三の瞳が額に付属しているかのように人混みの濁流を巧みにすり抜けている。

その闊歩技術は慣れで培ったものなのだろうか。
流れに棹さす彼らを俯瞰的に眼球で追っているだけでも、ハイクは酔ってしまいそうだった。

（どうして連中は、あんなにも上手く進めるんだろうな）

そこでハイクは切符売り場の方に非難がましい目線を移した。

そこには並ぶ気が星の彼方まで遠のく長蛇の列が展開している。

販売機は何十台も横並びに設置されているが、需要と供給のバランスがまるで一致していない。

誰一人として、しかるべき改善を施すように国に推奨しないのは、この時間帯が限定的に集中して混み合うピーク時だと理解しているからだろう。

ハイクは肩で溜息を吐き、そつと右手を握り締める。

手中に求めたのは、『世界鉄道』の中で最も値段が高い切符の感触だ。

『永久切符』。

どこで下車しても構わないという宿泊ルームつきの無期限切符である。

恐ろしく長い行列の最後尾から、心を折ることなく辛抱強く並び続けた成果。

手に入れるのに苦労した。

あの貴重な経験はできれば二度と味わいたくない。

最初くらい行き当たりばったりではなく調査するべきだったかもしれない、と猛省しても後の祭りである。

（さて、気力もチャージしたことだ。そろそろ行くか）

ハイクは切符を握ったまま前方を見据えた。

いつまでも現実逃避気味に立ち止まっているわけにいかない。

切符を購入した次には、第二の試練が待っている。

駅前のスクランブル式交差点と駅構内の境界線上に、一時的避難をしていたハイクは意を決して一歩前へと踏み出した。

たちまち携帯電話で取引先かどこかと通話中のサラリーマンと肩が接触し、外へ弾かれそうになる。

サラリーマンはハイクに一瞥もくれず、キャリアバックをごろごろと引きながら人の波を海水魚のように泳いで消えて行った。

早速、出端を挫かれた気分を味わった。

しかし、ここで膝をついたら負けだ。

ハイクは気を取り直して人々の生け垣へと潜り込む。

目的の改札がどこかにあるはずなのだが、渦の中心では東西南北さえ怪しかった。

さながら樹海の奥地にでもさ迷い込んだ心境である。

コンパスの代用として駅員に訊ねようにも、目にするのは忙しげに擦れ違う人々の頭ばかりで、もはやどこにいるのか見当もつかない。

となれば頼みの綱は案内の矢印だ。

ハイクは人と人の脇を縫うように、『世界鉄道・東大陸南行き』のプラットホームを示す矢印をひたすら追いかけた。

濁流を構築する人の密集度は奥に進むに伴って、いつそう濃厚になっっていく。

全神経を鋭敏に働かせ、ゆっくりとではあるが着実に前進する。

急がば回れ、だ。

やがて拙くはあるが、前後左右の不規則な流れでも前進する要領を得てきた。

スタートラインから目的の改札まで、ようやく半分近く進んだところである程度のコツを掴み、ハイクの心にも余裕が生じる。

そんなおり、化粧室のマークが目に残った。

集中力を限界まで引き上げていたハイクはこれ幸いに、一休みという名目で男子トイレに立ち寄った。

中には誰もいなかった。

外ではあれだけの人間が溢れているのに、青いタイル張りの空間だけが時流に乗り遅れたかのように乖離していて、奇妙な感覚に陥る。

（まあ、そういうものなんだろう）

諸事情によって少しばかり『一般常識』に疎いハイクは勝手にそう納得してから、洗面所の鏡に顔を向けた。

そこでやや疲弊した様相の自分と目が合う。

くせつぽいが、清潔を保つように整えた黒髪。

くつきりとした二重瞼。

漆黒の眼球。

色は白くても健康さを伴う肌。

年齢は一七だが、顔立ちはそれより若干大人びている。

中肉中背がまとう衣服はとても身軽だ。

赤と黒の細かいボーダーラインが入った半端袖のTシャツの上に、ダークブルーのフードつきパーカー。

下はグレーのサルエルパンツとショートブーツ。

装飾品は素朴さが意外とお洒落な風味を醸し出している腕時計のみ。

これから『世界鉄道』に乗って目的のない、さすらいの旅に出るといふのに手荷物のバッグ一つ持っていない。

旅行に必要な日用品くらいなら『列車内の設備』で購入できるとは言っても、ここまで手ぶらな乗客も珍しいだろう。

ハイクがこれから乗車する予定の『世界鉄道』という路線は、基本的に庶民が乗れるような交通機関ではなかった。

政府のお偉いさんや世界的な著名人しか乗車できないとか、そういう地位の格差を内包する嫌な話ではない。

もっと単純に金銭的な面で一般人が手を伸ばしにくいのだ。

その代わり、切符を購入できるだけの金さえあれば誰でも乗れる。

——この惑星の六割を占める海域を分かť、東大陸と西大陸。

そんな空と海と陸の領域を持つ世界を、国境に関係なくレールで繋いでいるのが『世界鉄道』だ。

街から街、国内から国内単位の移動ではなく、国内から国外への有意義な移動を旨とする旅客のための列車。

ただし歴史はまだ浅い。

現時点では東大陸にしか路線も展開されておらず、西大陸とは結びついていない。

しかし、噂によれば海の上を線路が走る科学技術も、すぐそこま
で完成しているらしい。

いずれ『世界鉄道』が世界を結ぶのも時間の問題なのかもしれな
い。

ハイクが与り知らない大人の事情が解決されれば、の話だが。
ハイクは鏡の中の自身から視線を逸らし、腕時計を確認する。
乗車予定の列車が出発するまで、しばしの猶予がある。

昼時ということもあって空腹は感じていた。

情報によれば列車内には、有名なシェフが運営する高級レストラ
ンも多く導入されているようで、味も一流なのだそうだ。

上級なご馳走にありつくには、まず改札である。

目下の懸案は命の次くらいに大切な手元の切符を失くさないよう、
そこへ辿り着くこと。

あの荒波のような人の流れに戻るのはいささか憂鬱だったが、そ
の後に待つ世界の想像が眼前に立ち塞がるデメリットさえ中和して
くれる。

（踏ん張り時だな。ここさえ乗り越えれば天国が待っている）

天国が、待っている。

意図せず思ったその例えに、ハイクは僅かな苦笑をもらした。

（確かにおよそ一年後に待っているのは天国……いいや、地獄だろ
うな……）

そんな考えを拭い捨てるように軽く頭を振る。

ハイクは両手を握り締めながら、一念発起して手洗い所から出た。
そして――

「何、だ……？」

人間たちは消えていた。

静寂である。

互いの足りない部分を補完し合うみたいにな、あれだけせめぎ合っ
ていた人々の姿が、駅構内から忽然と消失していた。

駅員もいない。

改札も電光掲示板も駆動していない。

人混みを苦勞して進んでいた自分の姿が馬鹿馬鹿しくなるほど、目の前は空虚で異様なしじまに塗り変わっていた。

それこそ数百人単位の大規模な神隠しが発生したかのような光景いや、むしろこれはハイクの方が神隠しの対象となったのか。

どちらにせよ、絶句ものの非現実的な状況に遭遇したハイクは、
「……はあ、巻き込まれるのは苦手だ」

重い溜息と共にそう呟いた。

彼の淡泊な反応は、多くの人間が駅から消えた異常事態にも劣らないくらい、現実味に乏しかった。

つまり、

「貴様……何だ」

「なぜ我らの結界内に部外者がいる？」

「その上、明らかに同胞ではない。何者だ。唱えよ」

つまり、完璧な無人ではなかったのだ。

あくまでも『人がいない』という観点を詭弁の主軸にするなら、確かにこの場に人間は不在している。

そう。

ハイク自身を含めて、彼の視界に人はいない。

「ナキィエクイルド」

名乗ったのは、『彼ら』に対して敵意の類を抱いていないと伝えるための表明だった。

もつとも、口にしたものは適当に思いついた偽名だが。

ハイクはパーカーのポケットに両手をつ込み、片足重心という締まりのない体勢で構えていたが、視線だけは注意深く『彼ら』に注いでいた。

数は七体。

全員が全員、昨今の近代的な人間社会の模様に対して、ひどく浮いた出で立ちだ。

ポンチヨに近似した布を繋ぎ合わせることで独特加工した民族的

衣装は、世代、時代の違いというよりも、種族、生きている世界観の相違を印象づけ、人工物ばかりのこの場にはどうしても馴染めない異質の雰囲気を押し出していた。

そして、ハイクの私見は正鵠を射ている。

とは言え、外見はハイク同様、人のフォルムに準じたものだ。

頭と髪があり、肌色の顔と表情があり、胴体に付属する手足があり、言葉を話し、言葉を理解するだけの思考と思想を持つ。

だが、肉食獣にも似た獰猛な瞳と銀髪が、決定的に彼らが人ではなく『彼ら』であることを明かしている。

「個を識別するための呼称など訊いていない」

一番手前にいた男が威圧的な口調で言った。

リーダー格だろうか、人間の外見を基準にするならば二〇代後半頃に値する容貌。

尖った目つきの内部に獣のそれが潜んでいる。

「我らが回答として貴様に望んだのは、貴様個人の無価値な名称ではなく、所属名だ」

もはや『人間だ』と言って押し通せる空気でもない、とハイクは判断した。

「別に故意的に割り込んだわけではないんだが。俺はたまたま居合わせただけだ。お前たちが界限の探索を怠ったせいだろう」

「はぐらかさず素直に質問に答えたらどうだ、吸血鬼」

ハイクごと空間を蹂躪する勢いで一気に肥大した殺気。

視認できない無数の刃物が全方位から飛来したかのように、ハイクの全身がぴりぴりと痛んだ。

視覚や触覚を介した情報として、痛覚にまで影響を及ぼすほどの圧力。

単なる霊長類では放出も容易ではない超自然的な殺意。

だが、七つ分の重厚な敵意を照準され、針のむしろに座ったはずのハイク当人は臆する風でもなく、相手を小馬鹿にするように肩をすくめた。

「穏やかではないな。これだから『略奪者』は苦手だ」

「貴様、我らを愚弄するつもりか」

「いいや、そんなつもりはない。気分を害したなら謝る。悪かった」
ちよつとした挑発に反応して手前の男が双眸を凄めたので、殊勝な態度とは言い難いが、ハイクは素直に謝罪を口にした。

「というわけで、ここから早急に出してくれないか。俺はお前たちの儀式だの規律だの血生臭い前時代的な掟だの戒律だの、そういうのに干渉するつもりはないんだ。また詮索するつもりもない。そもそも興味がないからな」

嘘ではない。

ゆえに、彼らの射抜くような眼差しからハイクは目線を逸らさなかつた。

「つまるところ単なる旅鳥なんだ。無所属のな」

「なるほど、流れの吸血鬼か」

ハイクの様相から納得したのか小さく頷く男だったが、彼の口からハイクが期待した通りの言葉は返ってこなかつた。

「しかし、残念ながら見逃すわけにはいかない」

「ああ……もしかして、この状況は部外者が目撃したらまずいシーンだったのか。ちなみに俺は口が堅い方だ」

「この場は我らにとって誇りを取り戻すための計画、その一端だ」
その単純かつ自己中心的な返答に対し、ハイクは呆れ気味に鼻で笑つた。

七つ分の視線が鋭さを増すことにもお構いなしに、吸血鬼の少年は粹なジョークでも言い出しそうな口調で、

「おいおい、よしてくれ。この場面に俺が居合わせたのは、そつちの不備だろう。それはお前たちの責任だ。自分たちの失態によって生じた不利益を、他人に押しつけないで欲しいものだ？」

「ごもつともだ。非はこちらにある。正論だ。弁解するつもりは毛頭ない」

「だろう？」

ハイクは表面上友好的な笑みを浮かべたが、内心では渋面を作り舌打ちをしていた。

（開き直ったか。だから、言葉で解決できないことは苦手だ）

男は一步前に踏み出して言う。

「だが、あいにく我々は自らの非を認めた上で、貴様を糾弾できる権利がある」

「やっぱり、そうなるのか」

「困め」

男の端的な指示に、周りの同胞たちが動き出した。

獲物を追い詰める獣のような拳措で、扇状に陣形を組んでハイクを包囲する。

「問答無用、か。今の俺は争いとか好まない平和主義者なんだが」
ハイクはまたぞろ溜息をこぼした。

同時に自身が置かれた状況を把握するべく、視界から有益な情報を汲み取ろうと抜け目なく周囲に視線を配る。

伏兵の存在を確信していたからだ。

それも、おそらく目の前の集団よりも厄介なのが、最低でも一人（しかし、人狼がこんな都会にまで出っ張って一体何をやってたんだ？）

そこで初めて疑念を抱いたハイクの目に留る物体があった。

（あれは……）

一〇歳前後の小柄な少女が地べたに横たわっている。

その身長と同等まで伸び切った黒髪が特徴的で目を引いたが、容姿ははつきりと見えない。

人狼たちがハイクの視線を憚るように、立ち塞がっているからだ。意識があるのかないのかも、ハイクの位置からでは確認できなかった。

（ますます面倒そうな場面に出くわしたな。仲間割れか？ どうせ規律だの何だの絡んでいるんだろうが）

「なあ、その子、ケガをしているようだが手当はしなくていいのか」

ハイクは適当に思いついた可能性を脳裏に並べてから、憶測でそう発言してみた。

実際に負傷しているかどうかは分からない。

しかし、手前の人狼はさらに憎悪を込めた目つきでハイクを射抜き、警戒と威嚇を含んだ低い声をあげた。

「貴様には関係のないことだ」

「そうか。まあ同感だ。内部事情をどこの馬の骨とも知れない吸血鬼に、おいそれと言うわけにはいかないだろう。……なあ、どうせならこのまま互いに無関心を貫かないか？」

「それとこれとは話が別だ」

人狼側は断固として意見の姿勢を変えないつもりらしい。

ハイクはやれやれと言わんばかりに、かぶりを振って嘆息した。

「人狼部族には民族的な価値観から、頑固者が多い印象を持っていたが、その偏見はあながち的外れでもなかったみたいだな。まさかここまで融通が利かないとは予想以上だ」

「黙れ、無法者。衝動のまま人の血を無差別に食い散らかすバケモノが」

「大昔のことを言ってくれるなよ、四足獣。現代の吸血鬼は穏健だ。人の血なんて吸わなくても正常に生きていける」

ハイクの言葉を最後に、それ以上の言い合いは交わされなかった。本当は双方ともに最初から——相手の正体に気づいたその瞬間から——理解していたのだ。

吸血鬼が放つ言葉は。

人狼が放つ言葉は。

両者の耳には届いても心には響かないことを。

人々が唐突に消えた無音の駅構内で、ただ人外が存在同士が正面から睨み合う。

互いに合図など待つような間柄ではない。

そんな義理など相手に持たない。

好きなタイミングで攻撃に移る。

（動く）

そう予兆したハイクはパーカーのポケットから両手を出し、躊躇なく瞼を閉ざした。

刹那の暗闇を体感し——開ける。

瞬きという一瞬で、ハイクの瞳の色は変わっていた。

漆黒から血が滲むかのような朱眼へと。

同時、ハイクを囲む形で三日月型の陣営を展開する人狼たちが、凶暴な牙を剥いた。

最も前線にいた人狼が姿勢を低く落とし、爪を立てる要領で五本の指を開く。

極限まで縮めたバネを解放したような瞬発力で、地面を蹴り飛ばし跳躍する。

その人狼に引き続き、五体の狼が同じ構えから一斉にハイクに飛びかかった。

彼らは空中で器用に身を捻り、恐るべき回転速度を得たドリルと化して突貫してくる。

それに応じるハイクは無言のまま、パーカーの内側に右手を滑り込ませた。

（——人狼、か）

驚異的な身体能力を有し、五感は獣以上の感知力を備えている彼らは、けれど人間が映画や小説で描写するように、あからさまな銀イカンスロープ狼化現象を起こさない。

せいぜい臨戦態勢時に瞳孔が縦のスリット型に変わったり、もともとは黒の髪が銀に変色する程度のもの。

その外見の変態から別名『銀狼』^{シフト}とも呼ばれたりする。

彼ら人狼の特徴は『人型』という見かけに寄らない身体能力だ。

コンクリートの壁を片腕で粉砕する圧倒的な怪力と、自らの残像すら置き去りにする移動速度。

その両方を兼ね備えた人外種族相手に、生身で立ち向かえば人間だろうと吸血鬼だろうと、まず勝ち目はない。

(だからと言って、それが無敵というわけでもないが)

吸血鬼ハイク「R」セカンド。

彼が『血のような朱色に塗り替わった両目』で視認している現在進行形の世界は、その全ての速度がスローモーション化していた。

理由は開眼した血色の双眸。

吸血鬼の特殊能力——瞳術だ。

吸血鬼という人外種族は、人狼と違って身体面は人のそれと大差がない。

寿命や外見の老い方さえも、現代の吸血鬼は人間とほぼ同等である。

古代では、二〇〇の年月を生きる吸血鬼も『若者』という評価が吸血鬼たちの共通認識だったが、今では一〇〇歳生きたら長命とまで言われるくらいだ。

これは、彼ら吸血鬼が『過去の事件』を経て教訓を活かし、人類社会に適応するために、独自の種族的な進化——あるいは退化——を年月をかけてゆつくりと遂げた結果である。

伝承によると、ハイクたち吸血鬼は十字架や日光に弱く、鏡にも映らないバケモノとしてセンサーシヨナルな要素で語られているが、実際は異なる。

古今東西の吸血鬼は日中も堂々と街中を出歩くし、先程のハイクのように鏡にだって姿が映る。

無論、不死身でもない。

聖別された銀の弾丸だろうと、軍人が扱う量産品の弾薬だろうと、銃火器で心臓を撃たれれば吸血鬼だって死ぬのだ。

見た目だけではなく、細胞レベルで人に近づくような種族単位の変化が続いている吸血鬼は、それでも過程で失わなかった能力がある。

それが吸血鬼を吸血鬼たらしめている『吸血による同胞の量産』と、瞳術だ。

その二種類の特殊能力だけが、現代吸血鬼のDNA内部に色濃く

残っている。

おそらく、この特異点は次世代の吸血鬼たちにも受け継がれて行くのだろう。

そして、そんな吸血鬼の遺伝子情報を有するハイクが開花した瞳術は、『可視する世界をスロー再生する』というものだった。

リアルタイム
現実世界そのものに物理的干渉を引き起こしているのではない。時間が流れる速度はあくまでも一定だ。

吸血鬼の目が朱に染まった程度で、科学者がさじを投げるような自然法則の崩壊が発生しているわけではなかった。

ハイクの瞳術で変化するのは、彼の動体視力と言えは分かりやすいだろうか。

ハイクの視認する世界の動作が緩慢になって見えるのは、彼の体感的な問題であり、時間が引き延ばされているように感じるのは錯覚に過ぎないのだ。

現象的にはスポーツ選手などが体験するという、ゾーンやフローに近いかもしれない。

その証拠に、六体の人狼が銀色の風となって突撃してくる速度だけではなく、ハイク自身の所作もスロー世界の中ではゆったりとしている。

思考の回転速度だけが、スローモーション化した世界に追尾できるのだ。

この瞳術は行使すると目の色が朱に塗り替わる影響なのか、ハイクが知覚する光景の色彩を透明な赤にする。

視界は血の色に曇ってしまい良好とは言えないのだ。

それに、いくら眼球の動きと思考が人狼のスピードを追い抜いていても、体がついてこなければ力は意味をなくすだろう。

だが、そこは人間サイドの進化に傾向した人外種族。

足りない速度は人類の武器で補う。

ハイクはパーカーの下に装備するショルダーホルスターから抜き出した、黒金の回転式拳銃——リボルバーを右手のみで構え、亜音

速で肉薄してくる人狼に向けて容赦なく撃った。

機構はダブルアクション。

引き金を絞ることで撃鉄が自動的に起き上がり、銃口から銀色の鉛が飛び出す。

人狼の移動速度は脅威だが、ハイクのリボルバーから発射される弾丸の飛翔速度には劣る。

対敵時の距離が一〇メートル以上離れていたことも幸いした。

どれほどリボルバーから放つ銃弾が人狼の速度を凌駕していても、引き金を絞らなければ当然ながら火は吹かない。

戦闘開始時の距離が近すぎたら、発砲以前に彼らの強靱な体当たりを食らって、体がばらばらになっているところだった。

レンコン状のシリンダーに装填できる弾薬の数は、六つ。

現段階でハイクに突撃してきている人狼の数は、六体。

そして、ハイクが人差し指で引き金を操作した回数と、手首に軽い反動を受けた回数も、六回。

くぐもった発砲音がスロー映像の中で炸裂し、遅延する空気を震わせた。

銃口から虚空にのびた六つの弾道はハイクの思惑通り、忠実な直線を描く。

その軌跡の全てがハイクを裏切らないまま、竜巻じみた回転で向かいくる人狼の肉体へと綺麗に吸い込まれる。

銃器の扱いを一通り訓練したハイクにとって、目で追える標的に銃弾を撃ち込むことなど造作もないのだった。

（しかし、相も変わらず気味が悪い世界の見え方だな。この瞳術による恩恵は苦手だ）

あまり自身の瞳術効果を好んでいないハイクはこれ以上、能力を使い続けるのは無意味だと判断した。

無意識に行っている瞬きよりも、少しだけ長い意識的な瞬き。

すると、朱に染まっていた世界の映像があらゆる色彩を取り戻し、本来の時間速度が彼の体感に回帰した。

見れば、一発ずつ急所を撃たれた人狼たちが、ちょうど空中で大きくバランスを崩したところだった。

摩擦による慣性停止は期待できず、彼らは地面で激しくきりもみしながらハイクを巻き込む軌道で転がり出す。

しかし、ハイクはスロー世界でその被害に遭わない位置を見極め、すでに移動を完了していた。

山の上から急角度で転がり落ちてきたかのような勢いで、地べたを何度もバウンドする六体の人狼が、吸血鬼の両サイドを通り抜けた。

鎮静。

ハイクはそれらの惨状を涼しげな表情で一瞥し、銃のラッチを引いてシリンダーのロックを解除した。

スイングアウトで空薬莖を排出する。

内ポケットから予備の弾薬を取り出し、慣れた手つきで再装填完了。

「人狼は現代の吸血鬼をなめすぎだ」

数メートル後方で苦しみうめく人狼たちを無視し、ハイクは前方に銃口を向けた。

照準した先に中性的な風貌の人狼がいた。

少年か少女か分からない。

長身で落ち着いた佇まい。

慎重派なのか、その人狼だけが一斉襲撃に加わらなかった。

「あなたも知らないわけではないのでしょうか？」

人狼はどこか人形的な口調で唇を動かした。

声質からして少女かもしれない。

「私たち銀狼が、あなたたち吸血鬼に持つ感情を」

ハイクはリボルバーの引き金に人差し指をかけたまま、相手を疑わしそくに観察する視線を送り、小さく顎を引いた。

「もちろんだ。お前たちからしたら散々だった話だろう。同情はする。だが、大昔のことで俺に因縁をつけられても困る。これは八つ

当たりだ。俺自身はお前たち人狼に何も危害を加えていないんだからな。売られた喧嘩なら正当防衛のため甘んじて買うが、こちらから売る気は毛頭なかった」

「平行線ですね。それなら、誰が責任を取ってくれると？」

「責任？」

ハイクは首を傾げた。

「私たちは、もうこういう風にしか生きられないんです」

何を言っているんだ、こいつは。

ハイクがいよいよ胡乱に目つきを細めた時、

「皆さん、まだ動けますね？」

後ろで人狼たちが体を起こす気配があった。

ハイクは無意識に舌打ちする。

立ち位置が悪かった。

前方と後方を、リボルバー一丁では対応し切れない。

両サイドを視界に入れるようにハイクが体の向きを変えると、

「撤退です。ここは出直しましょう」

と、人狼の少女が言った。

賢明な判断だ。

人狼は個より集団を優先する特性がある。

手負いの仲間をこれ以上、戦闘させるわけにはいかないのだろう。

向こうもハイクの射撃技術に気づいている。

いかに人狼と言えども、不死ではないのだ。

ハイクとしても彼らが引き下がる姿勢を見せてくれたのは、あり

がたかった。

のだが、ハイクは人狼の少女をわざわざ引き止めて、

「おい、荷物を忘れていないか？」

顎をしゃくって言った。

吸血鬼の視線に注がれているモノを、人狼の彼女も視界に収めた。その眼差しには憎悪と侮蔑が籠っている。

まるで吸血鬼を目にしている時と同じ眼光。

「ああ、ソレならあなたに差し上げます。腐ってもこれが流儀ですから。戦利品ですよ。一旦、あなたに預けておきますから」

作り物めいた薄い微笑み。

その裏に抱く黒い感情を、一瞬後にはおくびにも出さず、人狼の少女は高く跳躍した。

瞳術を行使していない今では、目で追うのも一苦労だ。

七つの影が駅の構内からあつという間に去って行く。

「戦利品って……」

ハイクはパーカーの下に仕込んでいるショルダーホルスターに愛銃を戻しつつ、迷惑そうな表情を露骨に表した。

「別にいらないんだが……」

地べたにうつ伏せになり、浅い呼吸を続けている黒髪の少女。

人狼の民族的な衣装を着ているが、生地が薄い上に継ぎ接ぎだらけでぼろぼろだ。

「おい、起きろ」

近寄りながら呼びかけると、少女は朦朧とした目を開いてハイクの顔を見上げた。

その右眼はくすんだ朱、左目は宝石のような碧を湛えていた。

小さな切り傷や汚れが目立つが、オッドアイの少女は思ったよりも愛らしい顔つきをしている。

「いつまでもこんなところで寝ていると、色々面倒なことになる。せめて人目につかないところに移動したらどうだ」

事務的にそう告げて、ハイクは踵を返した。

彼女の正体や境遇についても一切関心を示さない。

厄介事の中心に、少女が携わっていることなど考察するまでもないからだ。

先程の人狼は去り際に『この少女を預ける』と言った。

そう宣言したからには、遅かれ早かれ取り返しにくるつもりなのだろう。

奪取するだけの戦力を拵えて。

しかしハイクとしては、少女の身柄などどうでも良い。
これ以上、人狼のいざこざに付き合う理由はないのだ。

「じゃあ、俺は行くからな」

感情のない声を発し、この場を早々に離れようとしたハイクだったが――

「おわっ、な、何だ!？」

ハイクのリアクションは大袈裟ではなかっただろう。

うつ伏せに倒れていた少女が、恐怖にでも抗うかのように呻きながら起き上がるまではよかった。

けれど、何を血迷ったのか背後からハイクに抱きついたのだ。

オッドアイの少女はハイクのパーカーを小さな両手でぎゅっと掴み、今にも泣き出しそうな表情で、

「……っ！」

唇をぱくぱくと開閉させた。

声が出ていない。

それなのに、いや、そんなことは百も承知なのだろう、少女はまるで何かを訴えかけるようにハイクに向かって音なき言葉を続けた。
ハイクの顔つきは驚きから困惑、やがては――苛立ちへと変遷し、

「あんな」

眉間にシワを寄せて、腰の辺りにある少女の幼い顔を睨む。

「お前、なんのつもりだ。慣れ慣れしいその手を離せ」

ハイクはパーカーを握る少女の両手を、冷淡に引き剥がした。

その反動で彼女の小さな体が後方によろめく。

しかし、それくらいでは少女も屈しなかった。

朱と碧の瞳に涙を溜めながらハイクに縋りつき、懸命に口を動かす。

「何だ、俺に助けて欲しいのか」

そう訊ねると、少女は肯定とも否定とも取れない曖昧な頷き方をした。

「まあ俺みたいな部外者でも、お前が連中に関する重大なトラブル

を抱えているのは察せる。けどな、それなら他を当たった方が得策だ。吸血鬼に解決を頼むなんて、余計にこじれるだけだからな」

「……っ！」

「悪いが俺は人狼のトラブルメーカーを匿えるほど大らかではないし、クレーマー処理の心得もない。大体、どんな義理があつて見ず知らずのお前を俺が助けなくてはならない。俺にメリットはあるのか。お前がそれ相応の利益をもたらすのか」

そこで少女は唇を引き結び、俯いた。

「分かったな？ ほら、もう行け。じきに、ここの空間も正常に入れ替わり、元に戻って人目につくはずだ」

ハイクは忌々しげに言い捨てて歩き出す。

けれど、いざ一歩前に踏み出すとパーカーの袖がクイツと後ろに引つ張られて、全然前に進めなかった。

（はあ……子供は聞きわけがないから苦手だ）

少女はなおも執拗にハイクに縋った。

よほど諦められないらしい。

何度きつい態度であしらっても少女はめげなかった。

「いい加減にしろ」

ついに痺れを切らしたハイクが、相手の本能的な恐怖心を誘うトインの声を発すると、少女の肩がビクツと小さく怯えた。

はつきり言つて武力行使はハイクの趣味ではない。

対話や金銭で平和的な解決が図れるのなら、それに越したことはないのだ。

相手はまだ外見上、一〇前後の幼い少女。

そんな彼女に暴力の象徴とも言えるリボルバーの銃口をチラつかせて脅すのは、かなり良心が痛むところではあった。

「それ以上、俺に近づくな」

それでもハイクは涙目の少女に告げた。

そこから先、一步でも進めば容赦なく引き金を絞ると。

少女は僅かの間、戸惑った様子でおろおろとした後、やっぱり前

へ踏み出した。

瞬間、がらんとした駅構内に乾いた銃声が一発、反響した。ささやかな鮮血が虚空に飛散する。

なのに、悲鳴どころか嗚咽さえハイクの耳朵には触れなかった。しかし、痛みを感じていないわけではないらしい。

少女は鉛玉が貫通した膝を押さえ込みながら、地面へ惨めに倒れ込んだ。

これまで必死にこぼさないように我慢していた涙も、激痛を引き金にととう決壊した。

ハイクは特に表情を作らないまま、リボルバーを懷に仕舞う。

少女は震える体を殻に閉じ込めるように丸め、額に嫌な汗をびっしりと浮かべて苦しんでいる。

ハイクはそんな彼女に歩み寄る。

少女は苦悶の面様を怪訝に歪め、片膝について覗き込んでくるハイクを見上げた。

何かを期待している彼女の眼差しに、けれどハイクが答える声はなかった。

ハイクは少女の右膝、リボルバーで打ち抜いた患部に目線移す。少女が痛みのあまり傷口を押さええている。

血に濡れた彼女の両手を強引にどかし、ハイクは自身の人差し指をそこへ無造作に当てた。

ぬるっ、と指先に湿った感覚が伝う。

それだけで形容しがたい激痛が走ったのだろう。

少女は瞼をきつく閉じて小刻みに体を震わせると、ついに失神してしまった。

「胸糞が悪い予感しかないな、これは」

ハイクは気を失った少女に構わず、そのまま彼女の血が付着する人差し指を舌先で慎重に舐めとった。

直後、ハイクは少女の置かれている状況の大半を察する。

人間社会にひっそりと同化し、人と同様の生活を送っている人外

種族。

その代表が現代の吸血鬼だ。

今も昔も彼らは大雑把に言って、三種類に分けることができる。

他種族——例えば人間や人狼の血液情報や遺伝子情報、細胞などを有していない純粋な吸血鬼を『純血』。

他種族が吸血鬼の吸血によって血液間で交わった結果、生まれた吸血鬼を『混血』。

吸血鬼と他種族が肉体的に交わった結果、母胎から生まれた吸血鬼を『劣血』。

そしてハイクの推測通り、少女はハーフだった。

摂取した血から得た情報によると、『劣血』だ。

それは吸血鬼サイドの呼び方で、人狼サイドの呼称を尊重するならば『原罪』か。

これで合点がいく。

先刻交戦した人狼の集団は、もしかすると『原罪』の少女を抹殺したかったのかもしれない。

人狼が吸血鬼に対して友好的でないのは自明の理。

それくらい昔から争ってきた種族なのだ。

それなのに吸血鬼と人狼が交わった結晶を、人狼が寛容に受け入れるはずがない。

（秘境に住む民族の中には、奇形を間引く習いが現在も残っている。人為淘汰か。いや、……あるいは『道具』にされていたのかもしれない）

どんな能力かは知らないが、この少女も吸血鬼特有の瞳術を保有しているはずだ。

オッドアイの片方、右眼の朱が怪しい。

その瞳が人狼にとって何かしらの利益を与える力だとしたら、彼女を殺すのも惜しいと考える可能性だってあるはずだ。

（どんな経緯かは分からないが、自分の宿命を察したこの『劣血』は、おおかた連中から逃亡してこんな都会まで逃げ出してきたんだ

ろう)

だが、それにしたって妙だった。思い過ごせない点が一つだけある。

駅から人が消えた、この状況だ。

仮想異世界を擬似的に現実の空間に倒置して構築する、神隠しに近い結界。

それは、あらかじめ『結界内部に閉じ込める対象』を設定できる便利な魔術の類だ。

人が己の生命力を削ってまで物理法則に抗い、人工的に起こす奇跡。

ハイクも詳しいわけではないが、吸血鬼や人狼が魔術を行使できないことくらいは知っている。

前述の通り吸血鬼の種類は大まかに三つある。

中には人間から吸血鬼になった者もいる。

だがしかし、『吸血鬼』という枠組みになった以上は、『純血』

だろうと『混血』だろうと、決して人ではない定義になるのだ。

人狼も外見こそ人間だが、ハイクたちと同じ人外種族である。

魔力は人の生命力からしか生まれない。

魔術は人の身でしか扱えない。

また、今日び高度な科学技術が発展した現代の人間社会では、魔術というオカルトチックな概念は、もっぱらファンタジーといったフィクション世界でしか受け入れられておらず、一般では実在するものとは認識されていない。

吸血鬼も人狼も魔術も、これほどポピュラーな存在が、しかし信じられていないと言うのは少々、当人としては奇妙な思いだった。

ともあれ、魔術師が現実に実在することを知っているハイクとしては、先程の一件に引っかけかりを覚えるのだ。

(人間、それも魔術を扱える人間が、一枚噛んでいるのか?)

たかが『劣血』の少女一体を抹消するのに、人間の手を借りるなど人狼らしくない行動だ。

らしくないと表現するのは、もちろん断言できないからだ。

人狼は過去の『吸血鬼狩り』で、人間という種族に対しては少なからず敵意を抱いていないのだから。

「いや、俺なんかが気にしても始まらないか。こういうことはシリアルに連絡するのが一番だろう」

誰かに聞かせるわけでもなく、そう呟いてハイクは静まり返った駅構内から退場した。

ぐったりと気を失っている『劣血』の少女に、振り返ることもなく。

3 | 私は彼を心から愛している。恨んでもいるが、愛してもいるんだよ

レッドアウトファミリー の三代目頭領は、今日も事務所で多忙な時間を過ごしていた。

荘厳な黒檀の執務机に組んだ両足を投げ出しつつ、赤いレザーの肘かけ椅子に座って、ぷかぷかと煙管で紫煙を吹かしている様子は気楽なものだが、その実、取り巻きの部下たちから殺到する報告に対して目まぐるしく頭を回転させている。

そんなボスの前に並ぶ黒服の男たちのうち、一人が口を開いた。

「ボス、例の金融企業から投資額の件について最終確認の書類メールが届いています」

「ああ、分かった。後でチェックしておくから、私のコンピュータにリンクしておけ。返信の文章内容はお前に一任する。粗相のないようにな」

「ボス、北の工場跡地を拠点に、素人に対して薬をさばいていた密売グループの元締めを捕縛しました」

「ご苦労。適当に痛めつけて情報を吐かせろ。そいつから関係のあるグループを芋づる式に炙り出せ。手段は問わん。ただし、硬派にな」

「ボス、先日下町に三号店をオープンした居酒屋 ランデブー がみかじめ料を払ってくれません」

「情けない言い方はよせ。自分が誰なのかもっと自覚を持って発言しろ。……とは言え、上納金は任意なわけだし、あそこの親父は頑固だからな。ま、構わんさ。用心棒が必要ないってことだろう。放っておけ」

「ボス、東町に拠点を置く レナードファミリー の構成員が度々、我々の縄張りで目撃されています。今月にいたっては一二件」

「ケツ、ぼつと出が一丁前にちょっかいだけはかけてきやがる。だ

が、向こうも派手には動かんだろうさ。こっちはトップが変わって大事な時期だと知っての偵察だろう。しょせん軟派なチンピラ風情の寄せ集めだ。当面、泳がせておけばいい。だが目は離すなよ。下町の連中にも警戒するよう忠告してやれ」

「ボス、変態です。　バベルズファミリー　がガサ入れにあつたようです」

「ああ知ってるよ。硬派だった連中が一体何をしくじったんだかな。こっちまで飛び火してこなけりや良いが……。それと私は変態じゃない。大変な、大変」

「ボス、ナイトクラブ　チェリー　のオーナーから是非ボスに猫耳メイド服着用の上ご来店ください、との熱い伝言を預かりました。ボスのファンクラブ会員の方々が待望しているようです」

滞りなく部下に指示を与えていた　レッドアウトファミリー　三代目頭領の少女――シリカ「R」サードの整った顔が一瞬にして引き攣った。

そう、誰がどう見てもそのマフィアのボスは少女だった。年齢は一五。

お嬢様風の顔立ちには年相応の幼さと、まだ成熟し切っていない凛々しさが同居している。

しかし小動物のように愛鏡のある大きな瞳と、平均よりも低い背のせいでシリカは一二、三歳の女の子にも見えた。

全体的にゆるくウエーブするセミロングの髪色は、染めた明るめのベージュで、前髪だけ両サイドにふんわりと流している。

着ている私服は、ネイビーブルーを基調とする薄い生地オーバーオールの一着だけ。

丈が短く、机の上に投げ出した足や太もが無防備なことになっているが、マフィアンスボスな彼女は周りの目を全然気にしていない。

「あの変態ロリコンじいどもが……」

右頬をびくびくと痙攣させ、シリカは忌々しそうに悪態を吐き捨

てた。

「そりゃあ確かに、私の見てくれがマスコットやストラップ、八分の一スケールフィギュアなどにして誰もが常時側に置いておきたくなるくらいキュートであることや、その手の企業からグッズ化の依頼が怒涛のように押し寄せないのを疑問に思うことには十分に理解を示せる。だが、どれだけ可愛かろうと私は レッドアウトファミリー の頭だぞ。似合うと分かっているも誰が軟派な猫耳メイド服なんぞ纏うか。断固として断っておけ。良いな、絶対だぞ」

満更ではないのか本当に嫌なのか、いまいち不明な反応をシリカが示すと、メイド服の件を報告してきた部下は残念そうに肩を落とし、

「ボス、私的にボスの猫耳メイドは拝見したい所思をここに固く表明——」

「黙れ、殺すぞ」

少女の一睨みで、いかつい顔をした大の男がしょんぼりと黙り込んだ。

「ボス」

「ああ、もう次から次へと……今度は何だ」

「ハイク様からお電話でございます」

シリカの側近である老紳士ヒカゲが、慇懃な動作で手のひらの携帯端末を差し出す。

シリカは訝しむように片眉を跳ね上げて、

「むふっ」

「ボス」

ヒカゲに一言でたしなめられ、緩んだ頬を慌てて引き締める。

「ふ、ふむだ。ふむ、の間違いだ。さつさと携帯をよこせ」

∞ ∞ ∞

ハイクは公衆電話を求め、駅前から離れた表通りにいた。

目的の電話ボックスを見つけて、四角い箱の中へと潜り込む。

マネーカードを機械にスキャンし、液晶画面に浮かんだ数字を覚えていく番号順に押す。

受話器を手に取り、コール音を三回耳にしたところで相手が出た。しかし、応じた声は妹のものではなく、彼女の側近兼教育係を務めている老紳士ヒカゲのものだった。

妹をトップにするマフィア組織からしてみれば、実の兄とは言えど完全なる部外者なのだ。

連絡が直結しないのも仕方がない。

むしろ、まだまだ新任の彼女がそういう回線の段階処置を施していたこと——ヒカゲのアドバイスだろうが——を褒めてやるべきだろう。

『もしもし』

それでも、ハイクとヒカゲは旧知の仲なので、電話はつつがなく妹へと繋がった。

「よう。シリカか、俺——」

『ちよつとちよつと、旅路の前に一体全体どうしちゃったの、お兄い。え？ 急に妹が恋しくなつて、ついつい電話しちゃったって？ もう、どれだけシスコなんだよつ。相思相愛じゃん。こんなことなら、やっぱりシリカの萌える声——〇〇選を収録したボイスレコーダーを持たせるべきだったかな。実は密かに用意してたんだ。お兄いが寂しくならないようにね。今から取りにくる？』

いつも通り人の話を最後まで聞かず元気なマシンガントークをかましてくれたシリカの浮ついた言葉が終わるまで、受話器を数センチばかり耳元から離していたハイクは苦笑いをもらし、

「……いや、遠慮しておく。そんなことより電話しても大丈夫だったか？」

『大丈夫大丈夫！ 万が一に備えて、お兄いのために使用できる時間を一日のどこかに五分は作れるようにスケジュール組んでるからそのシステムのおかげで五分貯金も溜まってるし。べ、別にシリカ

の声が聞きたくなった時は、いつだって電話してくれたって良いんだからねっ」

「素人一個人を優先するマフィアのボスとか心配になるんだが」
そうツツコミを入れると、シリカは快活な声で笑った。

『シリカ的には最後のツンデレ台詞かと思いきや、ストレートなデレ台詞だったっていう部分で萌えて欲しかったんだけど、まあいいや。それで、どうしたの？ まさか愛する妹の声を聞いて狂い悶えるただけに電話してきたわけじゃないんでしょ？』

それが主な要件だとしても、とシリカは自信満々につけ加えた。
ハイクは少し感心した様子で、

「流石シリカ、大きく勘違いしながらも空気だけは読めるな」

『てへっ。一応はボスなので。五感は敏感に働かせとかなきゃね』
向上心があるのは何よりだが、おつちょこちよいいな思い込みの激しさはボスとしての欠陥になり得る。

今度こっそりとヒカゲに注意を促しておこう、とハイクは頭の片隅に書き留めた。

『で、シリカに何の用だったの？』

「ああ、それがな。実は列車に乗る直前にトラブルに巻き込まれたんだ。今、駅前の公衆電話のボックスからかけているんだが」

『トラブルって、もしかして暴力沙汰？ それなら戦闘員でも送るうか？ いや、ここはむしろこのシリカちゃんが直々に——』

「その必要は皆無だ。俺が片付けたからな。でなければ、呑気に電話なんかしていられないだろう」

『はわあ、シリカしびれちゃうよ、お兄いのそういうところに』

「……実の妹に変態的な声を出された俺は、実の兄としてどんな返答をすべきなんだ？」

『あはは、せめて色っぽい声って言ってよっ』

シリカは愉快そうに笑った延長で、上機嫌に言葉を続けた。

『でもさあ、お兄いに絡んだチンピラも不幸だったね。勝てるわけないのに』

「いや、相手はチンピラではないんだが」

『へ？ そうなの？』

「大体そんじょそこらの人間ともめたくらいで、わざわざ多忙なお前に連絡なんかすると思うか？」

『……と言いますと？』

シリカも鈍感ではない。

ハイクの言い回しから不穏な響きを覚えたのか、彼女の声音が若干硬くなった。

そこに レッドアウトファミリー を率いるボスの影を感じ取ったハイクは、さらに声の温度を落として答えた。

「相手は人狼だ」

『——！？』

「とは言っても、俺が狙いだったわけではないみたいだが。たんにタイミングが悪かったんだろう。連中のトラブルに対して俺が巻き込まれる形だった。向こうとしてもイレギュラーだったように思う……まあ、結果的に俺が吸血鬼だと分かった途端、連中が目の色を変えて襲いかかってきたことには間違いないんだがな」

あの時、人狼たちはそもそもの目的さえひとまず横に置いて、ハイクに攻撃をしかけてきた。

身に覚えこそないが、吸血鬼という種はよほど人狼に恨まれているらしい。

ひよつとすると、怨念を現代に持ち越すくらい彼ら人狼は、大昔の吸血鬼に酷いことをされていたのかもしれない。

ハイクさえ知らない残酷な仕打ちを。

『人狼がこの街に……ケガとかしなかった？』

シリカの落ち着いた声を受話器が唱えた。

「俺は無傷だ。血の一滴もついていない」

『ホッ、それなら一先ず安心だよ』

「それよりシリカ、ここからが本題だ。あの場では運良く追っ払えたが、連中はまだ街に滞在していると考えていい」

『お兄いが吸血鬼ってバレちゃったしね』

『それもある。だが、それだけでもない』

『どういうこと？』

ハイクの脳裏に、黒髪の少女が地べたに転がり、苦しそうに泣いている姿がフラッシュバックする。

『見たままの状況から察するに、奴らの目的はいつも『劣血』らしい』

『吸血鬼と他種族の肉体的交配によって生まれた吸血鬼……だよな？』

訊ねあぐねるシリカの物言い。

受話器の向こう側では小首の一つでも傾げているだろう。

ハイクは電話ボックスの外に最低限の警戒心を払いつつ、

『人狼サイドからしたら『原罪』。人狼と他種族の肉体的交配によって生まれた人狼だ』

『ああ、なるほどねっ』

シリカは深々と得心した口調で、

『つまるところ、目的不明の人狼集団に狙われてるらしいその『劣血』さんは、世にも珍しい『吸血鬼と人狼の結果』なんだね？』
で、その子は今どうしてるの？』

『さあな』

肩をすくめ、ハイクはどうでも良さそうに言った。

『目立った負傷が見当たらなかったから、俺が一発だけ膝に撃ち込んでおいた』

『わお、過激だねっ』

『致命傷にならず、かつ他人が目視して見過ごせない程度の傷だ。今頃、街の総合病院にでも運ばれてるんじゃないか。一応は、その手配をしておいた。入院費一年分に相当する金額データを取得しているマネーカードを、手に握らせておいたしな。……今じゃ『不自然な結界』は消えて、駅構内にはすでに人間たちが行き交っている。見た目通りなら日常の光景に戻っているし、血を流している少女を』

見て見ぬふりをするほど人間も冷たい生物ではないだろう」

『むう、お兄いが赤の他人を無償で助けるなんてシリカ、ちよつぴりジャラシー』

そうは言うがハイクも無血ではない。

後味が悪いのだってごめんだ。

金ならそこそこ持っているし、自身の良心が痛まない程度の偽善活動に精を出すくらいは問題ない。

『でもさ、その「劣血」さんが吸血鬼と人狼のハーフなら、人狼の治癒能力も備わってるだろうから、お医者さんは傷の異常な回復力にビックリするんじゃない？』

「俺がそこまで心配してやる義理はないな」

きっぱり未練なくそう言い放つと、シリカは苦笑気味に『中途半端なんだか、線引きが上手いんだか……』と呟いた。

『てゆーか、人狼はどうしてお兄いが吸血鬼って分かったんだろうね。お兄い、人混みに紛れてたんじゃないの？ それに結界って？』

「連中を中心にトラップ形式の結界魔術が展開されていた。おそらく、内容は『人間以外の生命体を擬似的な位相空間に閉じ込める』

ようなものだろう」

『はー、にやるほど。それでお兄いが人間じゃないってバレたんだ。だとしても——』

「注目すべきはそこじゃない、だろ？」

シリカの思考を先回りして陳ずると、マフィアのボスは満足げに鼻を鳴らした。

『ふふん、流石はお兄い。シリカの考えなんてお見通しだね。以心伝心だっ』

ハイクは大通りに向けていた視線を、少しだけ足元付近に落とす。その仕種には僅かばかりの哀愁が漂っていた。

「……嬉しそうだな、シリカ」

『お兄いが心配してくれてるからね』

「お前こそお見通しじゃないか」

『あつたりまえっ』

胸の前で勇ましく右手をグーに握るシリカの姿を思い浮かべ、ハイクは柄にもなく何の含みも持たない微笑みをこぼした。

これまで誰にも、おそらくシリカにさえ見せたことがない、子供みたいな表情だ。

照れ隠しの部分からシリカに勘づかれないう、ハイクは喉を引き締めて話を再開した。

「シリカ、お前のシマに勢力不明の人狼が山奥から上京してきたのは事実だ。奴らの目的は『劣血』であって、俺たち吸血鬼とは直接の関連はなさそうだが――」

『だからと言って楽観視するのは良くない、でしょ？』

今度はハイクが先回りされる番だった。

「そうだ。結界魔術なんて代物は人間だけが扱える聖域だ。俺たち吸血鬼や人狼は、人の起こす人工的な奇跡は使えない」

『うーん、例えばさっ、人狼が都会にやってきたのは、彼らにとって汚点である「原罪」さんを消すためっていうのが、最も納得しやすいシナリオなんだけど……。腑に落ちないのは、その背後関係に見え隠れしてる魔術師の影だねー』

「そういうことだ」

『りょーかい。ちよつと探り入れてみるよ。皆にも警戒するように言っとくしっ』

皆とはファミリーやファミリー関係者たちのことだろう。

「深追いはよせよ。調べた上で無関係そうなら俯瞰しろ。やり過ごせそうなら、やり過ごせ。魔術師をバックにした人狼なんかに目をつけられたら厄介だ。可能な限り接点なんか持たない方がいい。特に俺たち吸血鬼はな」

そう口やかましく忠告し切ってしまった後で、ハイクはこめかみの辺りをぼりぼりと掻きながら悔いた。

シリカは仮にも レッドアウトファミリー を束ねるボスである。吸血鬼のみを構成員とするマフィアの女王。

そんな彼女に対し、部外者の自分が兄という権限だけで、ファミリーのことを横から口出しするのは、流石に過保護がすぎるのではないか。

ハイクはそうように危惧したが、それはまったくの杞憂だった。
『うん、分かった。ありがとうね、お兄い。わざわざ教えてくれてっ』

そして、ハイクは返すべき言葉を見失ってしまった。

そのせいで躊躇を思わせる無言が発生し、会話の間に不自然な空白が生まれる。

『あれ、もしもし？ お兄い？』

『いや、なんでもない。その……礼を言うのは、俺の方……だと、思ってた……』

受話器の向こうで息を呑む気配。

『……えつと、ごめん。聞こえにくかった。もう一回言つて？』

瞬間、ハイクは電話ボックスの窓ガラスに、もたれかかるように頭を押しつけた。

『お前は優しいな、シリカ』

『き、急に何なのさ。いきなり甘い言葉を囁いても何も出ないぞ。何も出ないぞつ。……出して欲しいなら出すけどさ……』

『いや、何が出るんだよ』

普段はあからさまな甘言や賛辞を控えているハイクが、しみじみとした調子で『優しい』などと言うものだから、さしものシリカも驚いてテンパった様子だった。

それからシリカといくつか他愛ない言葉を交わし、ハイクはそろそろ切り上げることにした。

腹も空っぽであることを抗議するように鳴りっぱなしだ。

『奴らのおかげで列車内のレストランで食事する予定が、大幅に狂ってしまった』

『お兄い、楽しみにしてたのにねー』

『その辺りのファストフード店で適当に満たすしかないな』

『あ、そう言えばお兄いつて携帯も持って行っていないんだっけ？
たまには生存報告ちょうだいよ？　じゃないとシリカは寂しくて死
んじゃうから』

「うさぎ発言はよせ。お前が孤独で死ぬタマか」
茶化すように返す。

だが、ハイクの予想に反してシリカから間の手はすぐになかった。
ハイクが受話器を握りしめながら不審に思っていると、

『……………嫌だよ』

シリカの声は、それまでの陽気さが嘘のように萎み、震えていた。
『シリカのこと忘れちゃ嫌だよ……………』

完全な不意打ちだった。

何か言い返さなくてはいけない。

そう焦る度にハイクの頭の中は真っ白になり、有効的な語彙など
一つも浮かばなかった。

その無言こそが本当の失言であると気づきながら、自身の情けな
さに落胆する。

おそらく沈黙は五秒もなかっただろう。

ふう、と溜息にも似た吐息が聞こえた。

『だーから、一日の間でも一回でも良いからシリカのこと思い出し
てね？　どんな妄想にも脳内シリカを使って良いから。酒池肉林の
限りを尽くして良いから。あ、でもリアルシリカが脳内シリカにや
きもち焼かない程度にねっ』

結局、言葉はハイクの中で見つからず、シリカが先に口を開いて
いた。

あれが演技だったのか、それとも一瞬だけ見せた彼女の脆い部分
だったのか。

ハイクはそれを全て見抜いた上で、

「……………なあ、今お前の周りには皆がいるんじゃないのか」

と詰問気味に訊ねた。

それが精一杯だった。

『ギクツ。い、いないヨ？ シリカー人だお？』

「……だよな。お前との健全な関係が勘違いされるもんな。冗談はほどほどにしておけよ」

『（い、言えない。すでにシリカが重度のブラコンであることをファミリーの皆にカミングアウトしてるなんて……絶対に言えない……！！）』

「……なぜだか今、強烈な悪寒が走ったんだが」

『か、風邪の引き始めじゃない？ くれぐれも体には気をつけてよ。それじゃあ、またね。お兄い！』

プツツ、と通信が途絶える。

ハイクは受話器を戻し、電話ボックスの窓ガラスに背を預けて頂垂れた。

∞ ∞ ∞

「最悪だ……」

側近の老紳士ヒカゲに携帯電話を手渡した レッドアウトファミリー 三代目頭領は、沈痛な面持ちで嘆きながら黒檀の執務机に全力で突っ伏した。

他の組員が席を外し、室内にいるのがシリカとヒカゲだけでなければ、こんな醜態は晒せないところだ。

「体に気をつけて、なんて皮肉以外の何ものでもございませんからな」

深みのある声。

ヒカゲは顎の下に蓄えている上品な白ひげをゆすりながら、シリカを慰めるように言った。

「しかしながらボス。本当にお見送りしなくても良かったので？ てつきり仕事をサボってでもハイク様を送り出しに行く予想し、実はボスが逃亡しないように事務所の出入り口に下の連中を展開していたのですが」

年季の入った朗らかな笑みを湛える側近の老紳士。

シリカは机の上に上半身を預けたまま、不満を灯した三白眼の目つきでヒカゲを睨み上げた。

「ふん、私が行ったところで兄上に『負い目』を感じさせてしまうだけさ。後一年なら無理して会おうと思えばいつだって会える。それに私たち吸血鬼は血で繋がっているんだ。肉体的な距離の遠さなど些末に過ぎん」

「人間で言うところの絆。それとも赤い糸でございますか？」

「赤い糸。ロマンチックな話だが、私たちの場合その赤は血の赤だよ」

重苦しい溜息をこぼし、シリカはふざけた調子をやめて椅子に座り直した。

それからぼんやりと天井を仰ぎ、手の甲を額に置く。

まるで太陽を眩しがる吸血鬼のように。

「だから、見送りなど不要。これで正解だったんだよ。兄上に残された時間は少ない。それなのに、それが分かっているのに、どうして私が彼を見送ることができる？ 私が見送りの場にいたら、それこそ兄上は自由な旅に行きづらくなってしまうじゃないか」

「どうして、そう思われるのです？」

ヒカゲは事務所に置いてあるコーヒーメーカーに歩み寄り、淹れておいたノンシュガーのコーヒーをシリカ専用マグカップに注いで差し出した。

シリカは湯気をのぼらせるマグカップをヒカゲから受け取り、「ハッ、愚問だな。一年前まで一般人同様の生活を送っていたのがこの私だぞ？ そこの阿呆な女子中学生が、いきなりマフィアの頭になったんだ。それまでの交友関係も捨て、一年間マフィアのボスとして生きるためのノウハウを徹底的に叩き込まれた。もはや今ではこの堅苦しい喋り方が完全に定着している。素に戻るのはいや——昔の私に戻るのには兄上と言葉を交わす時くらいだ。そして、そうなってしまうのも、兄上は自分のせいだと考えている。」

ま、当然の思考回路だろう」

ズズッ、と苦い液体をすする。

舌の上に甘みのカケラもない味が拡散し、甘党シリカの顔がしかめっ面になる。

『純血』の吸血鬼だろうとマフィアのボスだろうと、シリカの外見は一五歳の小娘だ。

事情を知らない他の人間組織に舐められないよう、せめて威厳と風格を維持するために、嗜好品までボスらしい振る舞いを普段から心がけているシリカだが、やはり慣れないものは慣れないし、嫌いなものは嫌いなままだった。

服装だつて表に出る時は、正装を心がけなければならない。

女性が好む『可愛い要素』など片鱗も含有していないブラックコ―ヒーのせいで、シリカが兄の癖と同様、不服に対して無意識のうちに眉間にシワを寄せていると、

「ボス、不躰な質問をしても？」

「あん？ 私の教育係を実直に務めてきたお前が、そんな質問をするのか。別に構わんが」

「恨んでいますか、ハイク様を含め私どもを」

その問いにシリカは動揺しなかった。

老紳士の視線を真っ直ぐに見つめ返し、シリカは淀みなく答える。

——当然だ、と。

「私は『純血』の吸血鬼だが、マフィアのボスなんぞになる前の生活を気に入っていたんだ。普通の人間になり済まし、人間らしい自由を謳歌して生きていたかった。こんな硝煙と血と金と悪意の臭いで充満するきな臭いアンダーグラウンドの世界なんかとは、一生无缘でいたかったさ」

シリカは手に持ったままのマグカップに視線を落とし、寂寥の滲む微笑みを浮かべた。

「だが、そうもいかないだろう。兄上は『黒血病』で余命が一年だ。二代目頭領の座から下りるのは当然。誰かがその後を継がないとい

けないことも分かる。そして、初代頭領ラストⅡRⅡファーストの実子である『純血』が、三代目の有力候補に選ばれるのは言及するべくもない。私たち吸血鬼の繋がりには、何よりも『血』を重んじるからな。能力や資質よりも、血。となれば、父の実子である『純血』の私が、三代目になるしかないわけだ」

「……ハイク様は僅か七歳で二代目頭領の座につきました。あの方は二代目を受け継いだ瞬間から、ボスをマフィアの世界から遠ざけるように、懸命に計らっていたのでございます。ボスが一年前まで遠縁の親戚の家に預けられていたのは、そのため」

「だろうな、とシリカは相槌を打ちながら、自虐めいた形に唇を歪め、

「兄上なりに私を慮ってくれていたんだろう。そのせいか、私は彼に対してどうしても惹かれてしまう。彼が実兄という実感がわかないのも離れて生活していたせいだろう。一年に一度、親戚が集う時だって彼は私に近づこうとしなかった。当時は嫌われているのだと思ひ込んで、ひどく悲しかったが……」

「同じ境遇に至って振り返れば、あれが不器用な優しさであったことを理解できる。」

立場が逆だったら、きっとシリカも同じことをするはずだから。

ヒカゲは吐息にも等しい愁嘆を白髭の上から落とし、

「……余命一年。あまりにも残り少ない自由。ボスはハイク様の貴重な余生を邪魔したくないのでございますな」

側近の表情とは対照的に、シリカは意地の悪そうな笑みを表出して、椅子の背もたれを軋ませた。

「ああ、そうさ。私は兄上が大好きだからな。世界中の何よりも。教育係のお前にはファミリー一筋のボスになるような指導を一年間ずっと受けてきたが……悪いな、私の心の置き場所は一ミリも動いていない。私は彼を心から愛している。恨んでもいるが、愛してもいるんだよ。この相反するはずの感情が同居する根拠を、お前は答えられるか？」

「はい。夢のない見解でございますが、おそらくボスが憎んでいるのはハイク様の『体と血』。そして、愛しているのはハイク様の『心』なのでございしょう」

「はは、お前には隠し事ができんな」

「お互い様です」

シリカは冗談半分、嫌味半分で言ったのだが、ヒカゲの面様はこちらの心を見透かしたように涼しげなものだった。

人生経験の違いから『この老紳士には敵わないな』と内心で述べても、絶対に音にはしてやらない。

そんな負けず嫌いの精神を発動した代わりに、シリカは穏やかに舌を回し始めた。

「だがな、私は真正正銘の吸血鬼だ。『血の繋がり』というものに、どうしようもなく愛着を抱く。ゆえに、私は父の『混血』であるお前たちを憎んでいるが、同時にそれ以上に愛してもいるんだよ」

「この上なく光栄でございます」

折り目正しいお辞儀をするヒカゲを一瞥し、シリカは落ち着いた微笑を瞳に湛えて、

「憎悪と愛情の混在。これは私たち吸血鬼特有の思想回路なんだろうか。それとも、人間もこんな心境を持つことがあるんだろうか」

「どうでございましょう」

「ふん。それが把握できていない時点で、結局のところ私たちは人間の猿真似ばかりするシミつたれた吸血鬼風情つてことだ」

言い捨て、マグカップを傾けて一気に中身を飲み干す。

「ところでボス、本当にハイク様を放置なさるおつもりでございいますか？」

ヒカゲは言外に『そんなわけがないから白状しろ』と言っている。聡いな。無論、保険はかけておいたぞ」

「どのような」

「秘密だ」

「ボス」

ヒカゲが一步前に詰め寄ると、シリカはうつとうしそくに手をひらひらさせて、

「ああ、もう心配するな。ファミリーのパイプラインを利用したわけじゃない。それに、兄上の旅路の邪魔はしないよう釘をさした保険だ。備えあれば憂いなしって言うだろう？」

4 | 残された時間を費やしてまで、世界を旅する価値を見出せるだろうか

ハイクⅡRⅡセカンドはかつての地位を捨てた旅鳥だ。

世捨て人ならぬ世捨て吸血鬼。

彼が暮らしていた街で勢力を展開していたマフィア組織 レッド
アウトファミリー。

その創始者にして初代頭領の吸血鬼ラストⅡRⅡファーストと、
彼の妻レイニィⅡガーデンの間に生まれた『純血』の第一子。

そんなハイクが僅か七歳でファミリーの二代目を継いだのは、ラ
ストが原因不明の失踪で行方知れずになったからに他ならない。

しかしながら、一癖二癖もある吸血鬼集団のボスを九年間務めて
きたハイクも、およそ一年前に吸血鬼特有の病を患ってしまい、そ
の座を下りることになった。

どんな運命のイタズラか、一〇年も前に病死した母レイニィと同
じ『黒血病』を。

『黒血病』とは死に至る不治の病である。

血管を巡る血が時を重ねるにつれてドス黒く変色していき、終い
には硬化してしまうというもの。

現在、その治療法は見つかっていない。

本来の身分を偽ったまま人間界に医者として活躍する吸血鬼も多
々いるが、こればかりは打つ手がないという見解で概ね一致して
いた。

病死した母レイニィと同じ『黒血病』にかかったと発覚した当初
は、ハイクも随分と落ち込んだものだが、今では逆に開き直ってい
る。

どうせ治らないのだから、うじうじと悩んだりすることをやめて
前向きに考えてみたのだ。

これはマフィアの世界から足を洗うチャンスなのではないか、と。

そうして、ハイクは残り少ない余世を自由気ままに過ごすためにファミリーを捨て、終着点のない旅を始めようとしていたのだ。けれども、心残りや気がかりがないと語るならば、それは嘘になる。

常に心のどこかに引っかかりを覚えている。

まるで喉に刺さった魚の小骨のように、あるいは喧嘩の後のシリミみたいに、それはふとした瞬間に鎌首をもたげ、ハイクを憂鬱の海に誘おうとするのだ。

理由は誰でもない——実の妹シリカ「R」サードだ。

ハイクは『黒血病』をていの良い言い訳の材料にして、シリカにボスの座を明け渡した。

両肩に積もっていた荷がごっそりと下りたことを、ハイクが心の底から安堵したのは刹那だった。

直後、ハイクの内側に押し寄せたのは、これでもかと言うくらいシンプルで、それゆえに分かりやすく、重たい失望だった。

ハイクの瞳には、善と悪の区別すらできないのではないかと思えるほど純心に映っていた妹が——両親がいなくなったことで、この世で最後の『純血』の肉親となってしまった妹が——これから悪意に汚れた世界に足を踏み入れようとしているのに、ハイクは一瞬でも喜んでしまったのだから。

無論、シリカが後を継ぐのは必然だっただろう。

組織の頭がいずれ病でくたばると判明しているのに、ボスの後継者を選ばず育てないはずがない。

シリカが三代目になるのは血統的序列による宿命で、ハイクの意思に関係なく決まったことだったのだ。

理解は可能。

吸血鬼の観点からすれば実に合理的な選別。

だがしかし、だからと言ってそう簡単に割り切れるほど、感情論は単純ではなかった。

予防策も処置する術も見出せない『黒血病』。

不可抗力とは言え、そんな悪質な病を患ったせいで、一般人同然だったシリカに背負わせてしまったのだから。

本来は彼女が知る必要すらなかった道を。

ずっとハイクが責任を持って進むはずだった世界を。

『人間的な日常を送り続けたい』という、シリカのささやかな願いまで食い潰して。

シリカの教育は、ハイクの『黒血病』が発覚した瞬間から始まった。

一年が経った今ではボスとしての頭角を現し始めている。

皮肉なことにハイクよりも素質があった。

人の上に立つ才覚があり、頭の回転も速い。

こんな表現は憤むべきなのだろうが、シリカは紛れもなく向いていたのだ。

けれど、彼女は本当にこれで良かったのだろうか。

シリカは文句の一つも言わず、己の運命を受け入れた。

普通の一五歳の少女として過ごす人生が、家族の勝手な事情で唐突に打ち切られたのに。

彼女自身は人の日常を望んでいたはずなのに。

(クソ、いい加減気持ち切り替えないとな)

この一年間、堂々巡りした思考を払拭するように、ハイクはかぶりを振った。

こんな陰鬱な心境のまま列車に乗るのは、逆にシリカに対して失礼にあたる。

(あいつ、電話に出たということは、やっぱり見送りにくるつもりはなかったんだな)

下手をすれば二度と会えないかもしれないのに、見送りの一つもなかったのは、きっと彼女なりの気遣いだったのだろう。

『こっちは気にはせず、一人旅を存分に楽しめ』というメッセージ。

(こっちから電話をして、勝手にネガティブになっているのだから

世話がないな……)

ハイクは苦笑した。

少しだけ想像してみる。

シリカに背を向けて颯爽と列車に乗り込む自分を。

確かに無理があつた。

ハイクが味わつてきた世界を、これから先ずっと代わりに舐め続けることになる妹に、『行ってきます』など言えるわけがないのだ。

自責の念に捉われ、一步も前進できなくなるに違いない。

だから、これで良かったのかもしれない。

体が列車に揺れていても、心があの事務所に残ったままでは快適な旅なんて望めない。

(快適な旅。いや……宛てのない旅、か)

果たして、その意義を死ぬまでに見つけられるだろうか。

残された時間を費やしてまで、世界を旅する価値を見出せるだろうか。

そもそも、この旅こそ単なる現実逃避の象徴なのではないか。

シリカから、あのファミリィから、この病から、遠い世界まで逃げ出したい気持ちの裏返し。

そう問い詰められても言い返せる自信はなかった。

心も体も色々なことがあつて摩耗し、ガタがきている。

ほとんど顔も思い出せない母は不治の病で死に、凜々しかった父が謎の失踪を遂げ、そこから急激に変化した日常が始まり、約九年間、組織の利益のためにノンストップで走り続けた拳句、死の病に囚われた。

その疲労がここにきて、ほとんどのことをどうでも良く感じさせているのだ。

「はあ……俺の一生って何だったんだろうな」

そんな物憂げな言葉と溜息を吐くハイクは今、駅の地下街で見つけたファストフード店にいた。

スモークガラスに面したカウンター席に座り、ハンバーガーとフライドポテトを齧っている。

店内に居座る客の数は多く、若者と家族連れ、サラリーマンが多い。

昼時の影響か、ほぼ満席状態で普段は人気のないカウンター席でさえ空いておらず、ハイクの両隣も女性客で埋まっていた。

そして、先刻の咳きは独りごとである。

店内は『世界鉄道』の駅構内ほどではないが、それなりに騒がしいため、ハイクの神妙な台詞は誰の耳にも留らない。

はずだった。

「ふへ？ あなたの人生ですか？ そんなの決まってますよう。私ことサティーループに討伐されるための人生です」

トレイの上にあるフライドポテトの減る量がやたら速いと思ったら、原因が分かった。

右隣の席に座る見知らぬ少女が、沈黙考中のハイクの隙をついて横から手を伸ばしていたのだ。

通りで食べる回数とポテトの減り具合が比例しないわけである。

その犯人は一五、六歳の人間だった。

紫がかったショートボブの黒髪に、野暮ったい丸眼鏡。

顔立ちはなかなか整頓されている綺麗な感じなのだが、何をどう勘違いしたのか工事用の黄色いヘルメットを首に引っかけているコスプレ（東大陸極東の小さな平和国で流行っているサブカルチャー？）とかいう文化の一種なのだろうか、各所に謎のプロテクターを着装し、かと思えばピンクのビキニの上に、渋い黒の革ジャンを羽織るだけの格好。

支離滅裂な世界観に、何をどうしたいのかさっぱり理解できない。謎の元ネタ不明コスプレ少女は、トレイの上に展開するハイクのフライドポテトで口周りを塩だらけにしながら、不敵な笑みを浮かべた。

可能な限り関わり合いになりたくなかったのだが、話しかけられ

た以上、スルーは難しそうだ。

「ふふ。聡明なあなたなら、もうお分かりでしょう？ 私の正体は、泣きじゃくる吸血鬼もさらに泣きじゃくる——吸血鬼ハンターです」

「お前が誰だろうと構わないが、俺の食い物には手を出すな」

「あつ、ちよつ、取り上げないでくださいよう。けちっ！」

「やかましい。俺に何の用だ。要件を述べる。五秒以内に一万文字以上でな」

「一万文字！？ 物理的に不可能——」

「を可能にするのがお前の職業だ。肝に銘じておけ」

吸血鬼ハンターを自称する少女サティーループの手からフライドポテトを取り上げると、彼女はいじけた子供のように唇を尖らせ、なおも視線でフライドポテトを追ってきた。

「だから私は吸血鬼ハンターだつて自己紹介したばかりじゃないですか。吸血鬼ハンターは、吸血鬼をハントすることを主に——」

「さしずめシリカの差し金つてところか？」

「ぶふつ、なぜバレた!？」

「おお、かまかけてみるものだな」

「はわーっ！？ 卑怯です卑怯です！」

ぽかぽかと肩叩きの要領で殴りつけて抗議してくるサティを、ハイクは右腕で鬱陶しそうに跳ね退け、

「初対面の相手にいきなり吸血鬼だの何だのといった、危ない単語を持ち出して自己紹介してくる奴ともなると、シリカ路線の息がかつているとしか考えられないからな」

「うう……私は泣きじゃくる吸血鬼も刹那のうちに照れさせる可能性を秘めた将来有望な吸血鬼ハンターなのに……数多の吸血鬼を統べる吸血鬼女王のシリカさんにさえ素質を認められたのに……」

サティはよよとハンカチを取り出して泣き崩れているが、ハイクは彼女に一瞥もくれず退屈そうに欠伸を噛み殺し、

「なんだ、シリカが吸血鬼ということは知っているのか」

「もちろんですよ」

「吸血鬼に雇われる吸血鬼ハンターとは滑稽だな。お前、頭弱いだろ」

ハイクが気だるげにそう言うと、蛇口でも捻ったみたいに涙を止めたサティはニタリと笑って、得意げに両手の人差し指を左右に振った。

「ちつつちい。これは潜入捜査の一環ですよ。吸血鬼に与すると見せかけ、その内部事情を把握する。吸血鬼の習慣や生態データの採取を主な任務とする諜報員なのです」

サティが自慢たらしい顔でふんぞり返る。

けれどハイクはやっぱり無関心のまま、食べかけのハンバーガーを口の中に放り込み、素っ気なく答えた。

あっそう、と。

「み、見事な精神攻撃です。私の鉄壁の心に深い傷ができました。もう少し私に興味を持ってくださいよう。スルーしないでくださいよう。絡んでくださいよう」

「断る」

ハイクは不快に細めた目を右隣に向け、大袈裟なくらい大きな溜息をついた。

「大体な、お前の夢を壊すようで悪いが……吸血鬼なんて実在するわけないだろう」

「え？」

「あれは妄想の産物だ。人が生み出した架空のイキモノ。本来ならこんな場所でこんな解説をしていること自体がすでにナンセンスなんだ。それに……」

サティに言葉を挟ませる隙も与えず、ハイクはやや早口で言葉を続ける。

「ついでに言っておくと、シリカは俺の妹だからな？ あいつは口だけは達者だから、お前みたいなのは絶好の力モだったんだろう。つまり結論を言及すると、お前はからかわれただけなんだ。俺もシリカも単なる人間で吸血鬼ではないし、お前もハンターではない」

「ええ、そうなんですか!？」

サティは両頬に手を当てて、ショックポーズをキメる。

もはや仕込みのような気がしてきたハイクは、彼女にそもそもの疑問をぶつけてみた。

「お前、シリカに何て言いくるめられたんだ」

いわゆる変顔というやつだろうか、サティは頬に両手を押し込んだブサイク状態のまま、聞き取りにくい声で答える。

「えっと、三日くらい前でしたかね。私が駅前で『仕事なんでもします』のプラカードをラウンドガールのごとく掲げていたら、その色香にやられたシリカさんが、あたかも蜘蛛の巣にかかる寸前の蝶のようにひらひらと寄ってきたんですよ」

「あいつのために弁明しておくが、シリカは同性愛者ではないからな」

「シリカさんは訊いてもないのに軽く自己紹介してきた後に、『お前には吸血鬼を狩るハンターとしての素質がある。おそらく情報収集方面の才能だろう。先程、言及したように私は本物の吸血鬼だが、お前を一人前の吸血鬼ハンターにしても良い。まずその修行の手始めとして、この写真に写っている男を尾行するんだ。そして逐一、私の携帯に近況を報告しろ。フフ……そうすれば、お前は気づいたらすでに、どこに出しても恥ずかしくない立派な吸血鬼ハンターになっているはずだ。ま、信じる信じないはお前次第だが?』」

「信じたのか」

「信じました」

「……………」

「……………」

「ああ、お前のダメなところは熟知できた。致命的な例を挙げてやる。まず依頼主に尾行を命じられているのに、ターゲットである俺に接触している時点でアウトだ」

しかも能動的に。

「はっ、確かに!　ここ最近ろくに食事を摂ってなかったので、こ

の店の甘美な匂いに誘われて、つつい……」

サティはしょんぼりと首を垂れた。

喜怒哀楽の起伏が激しいのは結構だが、それも度が過ぎると情緒不安定な奇人だと思われるだろう。

（完全なるチヨイスミスだな、これは。シリカの奴、人を見る目はまだ養い切れてないようだ）

「うう、せつかく仕事がもらえたと思ったのに……天職が見つかったと思ったのにい」

しくしくと涙を流す元吸血鬼ハンターを放置して、ハイクは黙々とハンバーガーを口に詰め込み、それが終了すると席を立った。

「あ、あれ？ どこに行くんですか？ 私を置いて行くんですか？」
うるうると捨てられた子犬のような瞳を、野暮ったい眼鏡のレンズ越しに向けてくるサティ。

それにしても下手くそな上目遣いだ。

同情したくてもできない。

「どこに行こうと俺の勝手だろう。赤の他人に教える必要はないはずだが？」

「でも、まだフライドポテトとジュースがたくさん残ってますよう」
「俺は小食でな。悪いが、勿体ないから処理しておいてくれないか」
すると、サティはきょとんとした顔で自身を指差し、

「私が？ 良いんですか？」

「腹、減っているんだろ？ せつかくの食糧だ。無駄に捨てるのも環境に申し訳ない。人の食いかけて良ければ、後はお前が自由にしろよ。じゃあな」

「い、いただきます！ 必ずや完食します！」

食糧代くらい経費で落としてやれよ、我が妹よ。

などと思いながらハイクはファストフード店を後にする。

出る前にちらりと見たが、本物の吸血鬼であるシリカに『吸血鬼はいる』と信じさせられ、その拳句に本物の吸血鬼であるハイクに『吸血鬼はいない』と否定され、ころつとその説に寝返ったサティ

は目下の目的など忘却し、フライドポテトに夢中になっていた。

実のところ、ハイクの腹は八分目にも至っていない。

しかし、深入りすると厄介なことになりそうな相手だったので、今のうちに退散することにしたのだ。

きつと二度と会うことはないだろう。

そして、ハイクの予想は早々に外れた。

「いやはや経費で落とせるのは『永久切符』と電話代だけで、その他は自腹という条件でした。食いぶちはこれまで通り断食や盗みで何とか繋がますし、寝床はあなたのベッドに潜り込めば、ある程度問題は解決できるという算段でしてね」

「前提からお前の計画は破綻していたわけか。いや、違う。何を俺は冷静に分析しているんだ。俺が問い詰めたいたのは、何でお前が俺についてきているのかってことだ」

「あなたの尾行が任務なので」

当然のように、したり顔で胸を張るサティーループ。

「あ、そうだ。ポテトごちそうさまでした。ちゃんと完食しましたよう。有言実行という座右の銘の下に」

彼女は早食い女だった。

そのため店内で別れた後、ハイクが駅に向かって雑多な雰囲気の下街を歩いていたら、一分もしないうちに口周りを塩々しくするサティに後ろから追いつかれてしまったのだ。

「どうせ任務は失敗しているんだ。シリカから報酬は出ないはずだが？」

「じゃあ、あなたが雇ってくださいよう。こう見えても私、武術に長けてるんです。身辺警護から索敵、人肌恋しい夜の添い寝までお任せあれ」

華麗なウインクをキメたかったのだろう。だがサティはしっかり両目を閉じていた。

「もう、ほんと冗談抜きで帰ったらどうだ」

なおも金魚のフンみたいに付きまとうサティとの押し問答が続く。周囲に人がいなければ、駅での一件のように脅してでも遠ざけるが、それは叶わなかった。

シリカに目をつけられたとは言ってもサティは人間っぽいので、まさか撃つわけにもいかない。

「良いじゃないですか。男の一人旅なんてつまらないですよ。私みたいな美しい異性を連れて歩くだけで視界は鮮やかに彩ります。味気ないあなたの道中を私という存在が、お花満開に咲かせてあげましょうぞ」

「なんのセールストークだ、それは。お前みたいなコスプレイヤーが同伴しているだけで、奇異の視線を浴びている俺の身にもなれ」
事実、擦れ違う人々の視線が痛かった。

正直言っただけで地面に穴を作っても、入り込みたいくらいのレベルで恥ずかしい。

だが、サティはさして動じる風でもなく、真っ直ぐ前だけを見て競歩を開始する。

「ささ、行きましよう行きましよう。すでに『永久切符』は手に入れています。しかもあなたと同室する予定なのです！」

ハイクは思いつ切り双眸を剥いた。

「今、何て言った!？」

「ささ、行きましよう行きましよう。有言実行です」

「ふ、ふざけるな! おい! おーい!」

どこまでもアグレッシブなサティに右腕を引っ張られて、ハイクは地下街から太陽の下へと出るのだった。

∞ ∞ ∞

途中で人狼の邪魔が入ったことによって断念したあの人混みを苦勞して泳ぎ切り、目的の改札を切り抜け、なんとかプラットホーム

まで辿り着いたハイクとサティ。

端から端までが異様に長い近代的なホームには、フロントデスクがいくつか設けられていて、それぞれ二人の受付嬢が涼しげな顔で構えている。

ハイクとサティはそれぞれに購入した『永久切符』を受付嬢に差し出し、次にやってくる列車の宿泊手続きを行った。

『永久切符』の裏面に泊まる部屋番号が刻印され、それがそのまま部屋に取りつけられている電子ロックのキーになるのだ。

「私たちは二両目の一〇七号室ですね。いやー、楽しみですよう」
「おい、何ごともなかったかのように言うな。一混乱あつたおかげで、また一本逃しただろうが」

プラットホームに設備されている休憩ハウスに入るや否や、ハイクは一番手前のベンチに腰かけ、うんざりした面様でサティに文句をぶつけた。

「俺一人だったら、面倒な書類手続きなんて必要なかったはずだ。普通『永久切符』とパスポートを手にしていたら、それだけでパスされるんだからな。見るからに怪しい格好をしてる奴でさえた。…」

「お前みたいに」
非難されているサティは、けれど澄ました顔つきでハイクの隣に座り、

「確かに性を自覚しつつある思春期真っ盛りな年頃の若い男女が、二人だけで同じ部屋に泊まって旅行だなんて、社会人という名の汚れてしまった大人たちの立場からしてみれば、不謹慎で破廉恥で卑猥で良からぬ営みを看過できない部分があるでしょうからね。ストリートに忠告はできなくても。…いや、あるいはあなたが大量の書類を書かされたのは、私たち若いカップルに対する、受付嬢（独身）たちの遠回しなひがみだったのかもしれないよ」

「被害妄想が過ぎるんだが。受付嬢はお前と違って仕事に私情を挟まない。それと彼女たちを独身と断定するのは失礼にして早計ではないか」

フライドポテトにそういう効果があるのか、出会った時よりも饒舌になっっているサティをジト目で睨むハイク。

吸血鬼の少年は、息子の嫁に対する姑よろしくグチグチと嫌味っぽく不満を垂らし続ける。

「念のためにパスポートの他にも、身分証明書を持参しといて正解だったな。今回は俺一人だけが責任者として書類を書かされたが、二人とも書かされる羽目になったらお前はとうするつもりだったんだ」

「心配には及びませんよう。偽造パスポートの他にも、色々としりかさんに用意してもらいましたから。革ジャンのポケットに突っ込んであります。架空ですが身分なら証明できます」

ふふん、とサティはドヤ顔でそれを自分の功績のように語る。

「しかし、ちよろいもんですね。偽造かどうか分からないなんて、確認する意味あるんですか？」

シリカも一応は裏社会に生きる吸血鬼だ。

偽造が一目でバレるような抜かりはしないだろう、と傍らのサティには聞こえないよう呟く。

「しかもボディチェックもしないなんて。私、一応は護身用の得物を隠し持つてるんですけどね」

「それなら俺もだが。このパーカーの下にリボルバーを携帯している。ライフルだのショットガンだの所持していたら完全にアウトだが、護身用の自動拳銃はセーフだ。サイズの規定もあつたはずだ。持ち込めることができる得物のな」

「へー、そうなんですか」

「このご時世だ。反政府の旗を掲げる組織やテロ屋、大なり小なり人の世には危険が常に飽和している。自分の身くらい自分で守れということだろう。この列車だって、いつジャックされるかかったものではないしな」

「よく分からないですけど、国も色々大変なんですね。私は一日を生きるので精一杯ですから、国の心配までして余裕なんか

「ありませんよう」

「そうだな……」

ハイクはうわごとのように相槌を打った。

「皆、それぞれが大変なんだよな、きっと」

5 | そして——オッドアイの少女は微笑みを咲かせた

中規模都市のビル群。

その一角に事務所を置く レッドアウトファミリー は、人間社会でいうところの『金融マフィア』にカテゴライズされる組織だ。貨幣の信用取引、金銭の融通を主な業務とする銀行や保険会社など、金融機関に介入することで利益を得ている企業的マフィア。

もちろん密輸や密売、麻薬取引など非合法ビジネスにも目を光らせてはいるが、そちらが活動の主体ではなかった。

近隣の組織に比べれば歴史も浅い方で、構成員はさほど多くない。しかしながら、彼らファミリーには『吸血鬼の集団』というさなる裏の顔がある。

それは常識を持った人間からしたら、眉唾物だと言って深く考えもせずに切り捨てる情報だろう。

それに彼らは『吸血鬼らしい行動』を取ったりせず、変な言い方ではあるが、ごく平凡に人間の中に溶け込んでいるのだ。

疑う余地がないくらいに。

それでも、レッドアウトファミリー の全員が全員例外なく吸血鬼であるのは事実。

他種族の血液情報やDNAが混じっていない純粋な吸血鬼、『純血』。

吸血鬼と血液的に交わった結果、彼らの同胞となった元他種族、『混血』。

吸血鬼と他種族が肉体的に交わった結果、母胎から生まれたハーフの吸血鬼、『劣血』。

呼称の区別はあれど、彼らファミリーの間に差別は存在しない。その証拠に、構成員には全員、『R』のファミリーネームが与えられていた。

実態はそんなアットホームかつ硬派なマフィアのボスにして、『純血』の吸血鬼シリカⅡRⅡサードは組織の幹部たちと暗闇で会合していた。

会議室の窓とカーテンを閉め切り、電灯は全て落としている。会議用の円卓の上に灯る一本のろうそくだけが室内唯一の光源だった。

適切に空調を効かせている会議室には、まるでこれから黒魔術の儀式でも開始するかのような、不穏な緊張が立ち込めている。

「そう、あれは私がまだ人間だった頃の話です」

黒服を着る幹部の一人、強面の『混血』がドスの強い声で口火を切った。

「とある地下鉄の駅でのことでした。当時、ファンクな音楽を愛するバンドマンだった私は、ナイロン製のギターケースを背負い、片手にはエフェクターやシールドなど機材類を詰め込んだケースを携え、ホームに立っていました。スタジオ練習が終わった帰り道。終電も近い夜でしたので、人気もまばらでした」

円卓を囲むシリカや幹部たちははしかつめらしく眉間にシワを寄せ、真剣な眼差しで彼の話に聞き入っている。

ろうそくの明かりに照らされて不気味な陰影が浮かぶまま、幹部の男は低い声で続けた。

「腕時計を見ると、電車がくるまで数分ほど余裕がありました。足元に重たい機材ケースを置き、私がぼんやりと電車を待っていると一分もしないうちに私の左隣に七〇代後半と思しき老婦が一人やってきました。気品さえ窺える見事な白髪に、年相応のシワが刻まれている肌。それなりに折れ曲がった背。着ている衣服も見るからに上等そうで、特に変わった風貌ではありませんでした」

しかし、と彼は言い含めるように言葉を区切り、

「私は怪訝に思わずにはいられませんでした。なぜなら、その見知らぬ老婦は私のほとんど真横に並んだのです。距離などゼロにさえ等しかったように思います。私が心の中で首を捻った、その直後で

した」

ふわっ、と生温い風が全身を舐めるように吹き抜けた。

「地下鉄のホームでは電車が訪れる前に突風が巻き起こったりしますが、その現象ではありません。なぜなら予定の電車が到着するまでに、まだ二分ほど時間があつたからです。まるで氷の指が私のうなじを這つたかのように、ぞくりと背筋が粟立ちました。妙な違和感にも襲われましたが、愚鈍な私では瞬時にその正体を掴めることはできませんでした」

話はいよいよ佳境に突入するのだらう。

起承転結で言ったら、三番目辺りだ。

「老婦は私に関心など示さず、無表情で前方を眺めていました。左側には機材ケースも置いていたので、気味が悪くなつた私はそれとなくその老婦から離れようと思い、足元の機材ケースに手を伸ばしました。そこで、です。想像してみて下さい。私が前傾姿勢になる動作に伴つて、背負つたギターケースの下部は後方に持ち上がり、突き出してしまいます。前屈みになると体は腰の部分で折れてくれますが、ギターケースやエレキギターはそうなってくれません。その際、私は真横の奇妙な老婦に気を取られていたせいか後方不注意でした。そして――」

トン、と。

軽く押し返される感覚があつた。

それは持ち上がったギターケースの下部が、彼の後方に並んでいた誰かに当たつてしまつた感触だつた。

「機材のケースを手取る拍子に、私は見ました。両足の間から、私の後ろに並ぶ赤いハイヒールと青白い女性の足が。私は条件反射のように振り返り、相手の顔を見るよりも先に謝罪の言葉を述べました。しかし……そこには誰もいなかったのです」

心なしか風もないのに、ろうそうの炎が一瞬だけ強く揺らめいた気がした。

「私の思考は空白になり、隣には相も変わらず『距離が近いだけ

老婦』がいて、数分後に問題なく電車は到着しました。ただ、帰りの道で思い出したのですが、その駅のホームで一ヶ月前ほど前に女性
が斬殺された事件がありました。ニュースにもなっていました。その
の事件と私が体験し、見たものに関係があるかどうかは、いまなお
分かりませんが……」

重々しい口調で締めくくり、彼はろっすくに息を吹きかけた。

刹那、完全なる闇と沈黙が室内を支配する。

寒気をもよおす余韻を味わったところで、部屋の電気が部下の手によってつけられた。

「ふ、ふむ。な、ななななななかにきよつ、興味深い話は話だ
たぞ」

額に冷や汗を滲ませているシリカが、ひどく引きつった微笑で怪談を語った幹部を賞賛した。

「ありがとうございます、ボス」

「ま、まままままあ、幽霊だの何だのはににに人間の妄想に
す、過ぎん。い、いるかいけないかという『不確かさ』が恐怖心を駆
り立てるのであって、わ、わたつ、私にとつては下らんあれだ。脳
みそが個人にだけ見せる幻想なのだ。ふはははははははは！」

その時、音もなく会議室にやってきた側近の老紳士ヒカゲがシリカの背後に忍び寄り、彼女の耳元で故意的に囁いた。

「ボス」

「ぎよわあああああああああああああああ！」

シリカは椅子の上で数センチほど飛び上がった。

「予想以上のリアクションを……恐縮でございます、ボス」

「貴様……机の下で両膝を打ったではないか！」

心身ともにダメージを負ったシリカは、しつてやたり顔のヒカゲを涙目で睨み上げた。

一方、羞恥に顔と耳を赤らめるボスに対し、周りの幹部たちは小聲でひそひそ話を始めていた。

「冷血の暴君と恐れられるボスが幽霊を苦手とするとは……」メモメモ

モ」

「相反する意味で、弱点はトマトジュースとハイク様だけではなかった、ということだ。メモメモ」

「しかしそのギャップに萌えたのは、俺だけではないはず」

「激しく同意。弱点があつてこそ輝く強さってものがある」

「よし、週に一回は怪談会を開催しようじゃないか」

「週に一回、シリカさんの恥ずかしげな涙目を目撃できるとか、すごいご褒美……」

口々に好き勝手を言うミーハーな幹部たちの声は、しっかりとシリカの耳に届いていた。

シリカは右眉をヒクヒクと上下させつつ、この場にいる全員に対して後で別件から引く張り出し、折檻することを心に誓った。

「よし、これで全員そろったな。では始めるぞ」

弛緩する空気を改めるように咳払いし、シリカは年齢に似合わない厳格な声音で口火を切った。

彼ら レッドアウトファミリー の上層部が会議室に集まったのは、何も怪談話をするためではない。

「一度、話を整理して情報を共有しておこうか。吸血鬼と人狼の歴史について、私を含めてまだ疎い新参者もいるだろうしな」

シリカは会議用の円卓に放置していた煙管を手に取り、一口たっぷりと吸ってから、側に控えている側近に命令する。

「ヒカゲ、人狼のステータスを再構築しろ。再確認のレベルで良い」「かしこまりました、ボス」

老紳士は朗読するような口調で唱えた。

「人狼。別名、銀狼。民族として山の奥や秘境など、世俗と切り離れた自然の聖地で今なお生き延びている、私も吸血鬼と同じ人外種族の一つ。民族的思想、常に個より種全体を優先する傾向にある種族でございます。驚異的な身体能力に、卓越した五感は獣以上の情報感知力を備えておりますが、人間がフィクションに描くほど彼らの肉体があからさまな銀狼化現象——ライカンスロープを起こす

ことはございません。目つきが獣のように据わり、髪の色が銀に変色する程度のもので。なお、現存する人狼は世界規模に視野を広げて、一〇〇〇に満たないと予想されております」

「オーケー、それくらいで良い」

淀みなく人狼のデータについて述べるヒカゲを片手で制止し、後の言葉はシリカが継いだ。

「私たちの先祖、と表現するくらい昔の話だ。何を勘違いしたのか、高潔貴族を気取った一部の吸血鬼が人狼を奴隷にしていた歴史がある。何も知らない人間から見れば、ただ身分の高い人間が身分の低い人間を下僕にしていたようにも見えただろう。ま、悪意の根本は同類だがな」

過去の事実を下らなそうに、あるいは自身の汚点を自嘲するかのよう、シリカは小さく鼻で笑った。

「吸血鬼という存在の概念が、人間社会で広まったそもその起源。それは、高位の貴族を気取ったとある吸血鬼の一族に囚われていた人狼たちが、反乱を起こして逃げ出した後からだと言われている。当時にしては珍しい下克上を完遂したその人狼たちは、世界中に散らばった同胞を吸血鬼の檻から解放するべく、情報戦を闘った。彼らはなかなか狡猾だった。直接的な武力で吸血鬼に挑んでも、勢力的な問題から敗戦になるのは火を見るより明らかだったからだ」

そこで彼ら人狼が着目したのは、人間の恐怖心だった。

人の心理を巧みに利用した集団ヒステリーを起こすのである。

『吸血鬼』というイキモノが人間社会に隠れ潜み、人の生命を脅かす恐ろしい存在であることを誇張した民謡や童話から、あらゆる情報流すのだ。

「現代のようなメディアが普及していない時代だ。どれだけ貧乏でも一家に一台はあるテレビや、携帯電話やノートパソコンで手軽に繋がるネット回線の構築など言及するまでもない。人から人へ、国境まで超越する情報の伝達方法は印刷術か、地道に民衆の間に噂を流して広げるくらいしか伝播の手段はなかった」

しかし、人狼が作り上げた『吸血鬼の民謡、童話』は効果的だった。

当時、西大陸では魔女と告発された人間を断罪する、『魔女狩り』なる風潮が広まっていたのだ。

こちらの東大陸にもその趨勢は伝染し、吸血鬼の畏怖と相まって思想の浸透を加速させた。

「やがて吸血鬼という生き物のイメージが固まり始め、書物にも『夜な夜な人の生き血を吸っては殺すか同胞に変える恐ろしいバケモノ』として描かれ始めた。マイナスの意味で吸血鬼は一大ブームになったそうだ。そうして絶頂期を迎えた頃に人狼たちは、最高のタイミングで人を襲った。人間たちが抱く吸血鬼のイメージを殺さないように、吸血鬼に襲われたのだと一目で連想できる『忠実な死体』を作って、な」

人狼も多くの人間を襲ったわけではない。

記録が正しければ全体でせいぜい一〇人くらいだ。

それも、死亡すると必ず世間で話題になるような身分の高い者ばかり。

波紋を洪水に変えるのはそれだけで十分だった。

西大陸で広まっていた『魔女狩り』を参考に、東大陸にもやがて民衆法廷で吸血鬼を断罪する考えが確立したのだ。

「あとは簡単だ。人の疑心暗鬼の勢いを活かし、『夜の象徴、貴族風なイメージを持つ吸血鬼』に当てはまる吸血鬼を告発すれば良い。……人狼が企てたこの作戦において、たくさん吸血鬼が殺された。何の罪もない人間も合わせれば、犠牲者は約四万人に及ぶ。『吸血鬼狩り』や『吸血鬼裁判』は一時的なもので、知識人や裁判の在り方の傾向がより近代的に変遷したことから、衰退のいつとを辿ったが」

吸血鬼が日光に当たると灰になるだの何だのといった諸所の説は、人狼が人間に広めた『民謡や童話』の名残に過ぎない。

説得力を持たせるための人狼が作った設定だ。

詳細を書き連ね、多くの情報を添えるだけで不思議と真実味が帯びたように錯覚させる印象操作である。

「その『吸血鬼狩り』を経て、多くの吸血鬼は変わった。そもそも人狼を奴隷にしていた一部の馬鹿どもが、それで根こそぎ殺された。現代の吸血鬼はその歴史を猛省した上で、人間社会に適応する傾向が強い。共存の道を選んだわけさ。人狼は今なおその歴史に囚われたままだが、話を通じないというわけでもない」

「ボス、それはどういことですか」

先程、怪談を語っていた幹部の男が拳手して訊ねた。

すると、シリカは隣に控えているヒカゲにちらりと視線を送り、「中にはこちらに歩み寄ってくれる人狼もいる。そうだろう、ヒカゲ？」

「ええ、知り合いを伝って彼らとコンタクトが取れました」

「会議前にヒカゲには、ちよつとした情報交換を頼んでおいたんだよ。そして、交渉は成立したようだ」

シリカは口角を上げ、小悪魔じみた微笑を湛えた。

「連中の長と繋がった」

∞ ∞ ∞

七二両編成の旅客用列車『世界鉄道』の真髄は、連結する車両のでたらめな長さではなく、天井の高さや横幅といった内装のゆとりにある。

一両一両がとにかく規格外に巨大な様は、高層ビルそのものが横倒しになって走行している以上のインパクトを、見る者に与えた。車窓から外を望めば、それなりの速度で走っていることが窺えるのに、民間の普通列車による雑多な揺れは感じない。

おそらく下を向いて活字を目にしても酔わないだろう。

どんな技術かは知らないが、素晴らしく快適な旅になる予感だった。

——言うまでもなく、隣で喜びにうち震えているサティがいなければの話だが。

「数多の娯楽施設に世界各国の名物料理を網羅したバイキング、さらにはデパートも完備。……おお、ここは女性専用のマッサージュール。おや、あそこは美容院ですか。エステティックサロン、岩盤浴もありますね。美術館。博物館。図書館。健康ランド。室内プール。若者やカップルにはシアタールーム。ゲームセンター。カラオケ。なんと小規模なライブハウスまで。至れり尽くせりですね。全部、制覇しましょう。有言実行の名のもとに」

「黙れ。取り合えず俺たちの部屋に行く。扉の機械とやらに切符を通さないことには、チェックインしたことになるらしいからな」
「ああ、うっとりしちゃいますよう。まるで夢の国のようです。絶対に網羅しましょうね。有言実行の名の下に」

夢の国の住人となりつつあるサティの主張を受けて、ハイクは格車両に一つずつ溜息を落としていく。

乗車する車両を間違った二人（慣れないことだったのでちよっと緊張していたのだ）は、六〇両目の『多目的車両』に乗り込んでしまった。

どういう仕様なのか瞳を一番星みたいにランランと輝かせて、いちいち脇道をしまくろうとするサティの首根っこを掴み、ずるずるとみっともなく引きずったまま、ハイクは車両の幅広い回廊に行く。
「言っておくが、ああいう施設の料金は別だからな。『永久切符』は単なる乗車券だ。貧乏なお前にあれら全てを遊び尽くす財力があるのか甚だ疑問なんだが」

「？ 何を言ってるんですか。私のお財布さん」

「良いだろう。心優しい俺はお前に二つの運命を選ばせてやる。銃弾を一発だけ装填した俺のリボルバーを受け取り、自分のこめかみに銃口を向けて引き金を絞るか、今すぐ列車の連結部分から外に飛び降りて大地のシミになるか。さあ、好きな方を選択しろ」

「どっちみち私、死んじやうこと間違いなしじゃないですか！」

「ああ、絶命してくれとオブラートに包んで頼んだつもりだが？
あまり無遠慮に言えた言葉ではないからな。もしかして上手く伝わ
らなかったか？」

「あなたSですね！ オブラートで包むどころかデンプンで膜を作
る気もなかったでしょう！？ そんなに私を一人占めしたいんです
か！ 私を殺したって、あなたの物にはなりませんよ。私は皆の私
だから！」

ぷりぷりと肩を怒らせるサティとそんなこんな不毛な言い合いを
交わしながら、ハイクは宿泊専用の車両に乗り込んだ。

レジャー施設が密集している後方車両に比べ、こちらはやはり雰
囲気が落ち着いている。

左側は外に面していて、間隔をあけて配置されている窓からは、
流れ消える景色を目にすることもできた。

反対の右側は宿泊室で、部屋番号が振られた扉が等間隔に設けら
れている。

「えっと、私たちの部屋は二両目ですよ。うへー、ちょっと遠す
ぎません？ ここまだ五〇両目ですよ？ あっち側のエスカレータ
に乗って楽しましようよう」

「それもそうだな」

一両につき部屋の数九。

その中間地点、一〇五号室と一〇六号室の間には通路が横に割っ
て入っている。

ハイクたちが歩いている通路は歩行用の通路で、宿泊室を挟んだ
反対側にはエスカレータ式の通路が走っているのだ。

食堂車や娯楽施設が後方の車両に集積しているので、不人気な一
両目に泊まることになった旅客や足腰の弱い高齢者への、設計者か
らの配慮である。

「やっぱり人気なんですね、後方側の車両が」

「当然そうなるだろう。五〇両目の一〇九号室なんて立地条件が最
高ランクだ」

「一両目と二両目しか空白なかったですもんね。どうしてこうなつてしまったのでしょうか。私たち完全に時代に取り残されてますよう」
「原因はおま——いや、もう突っ込まないからな」
書類手続きのごたごたがなければ、望んだ部屋も取れたかもしれない。

けれど、それについて言及しても失ったものは取り戻せないだろう。

「そんなこと言わずにどんどん突っ込んでくださいよう、ほらほら。ここは無言実行で」

「喜べ。たつた今、お前の望みと俺の望みが共鳴した」

「——って、銃弾なんか無理ですよ！」

お尻をふりふりと振ってハイクを蠱惑的に挑発するサティが、リボルバーの銃口を見て慌てて佇まいを直した。

二両目に到着した。

右舷側のエスカレータ式通路から左舷側の歩行通路に移動し、一〇七号室を目指す。

二人はそのまま誰とも擦れ違うことなく部屋の前に辿り着いた。
『永久切符』の裏面に刻印されている宿泊コード。

その下に記載してある車両番号と部屋番号が、目の前の扉の数字と同じ値を示しているかどうか確認して、

「ここだな」

「ここですね」

ドアノブの上にカードリーダー用の機械が設置されてある。切手の裏面に刻まれた宿泊コードの情報を読み取るための施錠システムだ。

ハイクはパーカーのポケットから切符を取り出して、その機械に裏面のコードを照合させる。

ピツと簡素な電子音がしてロックがいとも簡単に解除された。

取っ手を回し、扉を向こう側に押す。

これでチェックインは完了だ。

まずハイクたちの視界に飛び込んできたのは、二メートルほどの短い廊下だった。

薄暗かったので、入り口の壁に手を這わせて照明スイッチをつけると、足元から上質な絨毯が奥のリビングまで敷かれているのが窺えた。

リビングにはソファやダイニングテーブル、大型の液晶テレビ、クローゼット、その奥にキッチンが設えられ、いずれの空間も白と黒を基調に、落ち着いた色調のインテリアでまとめられている。

リビングに隣接するベッドルームを覗くと、真っ白いシーツに包まれたツインベッドが置かれていた。

多少、寝相が悪くても転げ落ちることはなさそうだ。

パンフレットに記載されていた情報によると、バスルームには小型の防水テレビや音楽スピーカーまであるらしい。

日々忙しい時間を忘れて、癒しだけを追求する内装になっているようだ。

ユニットバスでないとこれも評価できた。

部屋全体のデザインは上品なシンプルかつモダンを主体にしているが、機能性や利便性を重視しており、細部にわたって心が休まるような配慮ある装飾になっている。

総評、はつきり言って非の打ちどころがない。

「ほへー、すごい贅沢ですねー」

サティがリビングの真ん中に突っ立って感嘆の声を上げた。

「旅の生活には不自由しないだろうな。下手に上質にこだわったホテルよりも快適だ。行きすぎた高級感庶民には場違いな気がしてくつろげない。バランスが大事なんだ、バランスが」

「その点、この部屋はどの客層にも受けそうですね。ふむふむ、壁も防音仕様のようですし、ふふ……夜に大きな声を上げても問題はなさそうですよ?」

ベッドの上で意味ありげにシナを作るサティ。

聞きようによつては、異性の自由な想像力を良からぬ方向へ刺激しかねない言動だが、ハイクは右から左に流した。

「取り合えず、シャワーを浴びてきても良いでしょうか」

ハイクは無言でリボルバーを手にした。

「ち、違います違います！ たんに私が入りたいだけです！ 他意はありませんよう！」

サティは血相を変えて両手をぶんぶんと左右に振る。

「三日ほど川で裸になって水浴びした記憶がないので、体臭が気になるんです！」

確かに彼女からは、ゴミ捨て場を彷彿とさせる悪臭を感じていた。近くに寄らなければ分からないレベルだが、ささやかに異臭がするのだ。

相手が人間とは言え、一応は異性なので口にしないでおいたが（異性の鼻から毛が飛び出しているのを発見してしまい、指摘しようかどうか迷う心境に近いだろう）。

「それなら、さっさと入ってこい。お前が出たらデパートの方に買い出し行くぞ」

ハイクはリボルバーをパーカーの下に戻し、何気に公然わいせつ罪に抵触した過去を持つサティに対して、憐れみの視線を投げかけながら告げた。

「デパート？ 日用品でも買いに？」

「それもあるが、お前の服装があまりにも不憫だからな」

「？」

「自覚ないのか」

「よく分かりませんよう」

サティは演技でも何でもなく本当に分かっていない様子で首を捻り、バスルームに向かった。

彼女は半開きにした扉から顔だけをリビングに突き出し、

「覗かないで下さいね？」

絶対に言うと思った。

「では」

脱衣所からサティの鼻歌が聞こえ始めた。

（先が思いやられるな。これだから他人といるのは苦手だ……）
どうしてこうなったのか。

それも初見の相手をパートナーにした二人旅だ。

このままサティと同じ部屋で旅行を続けるのは、勘弁願いたかった。

気休めに目を閉じ、サティから逃げる計画を頭の中で企てていると、

突如、敵を威嚇するサルみたいな咆哮が室内に炸裂した。

——全裸で。

取り乱す、という動詞を体を張って分かりやすく実演するサティが、バスルームの方を必死に指差す。

「長い髪の毛の、黒いのが、もじゃーって、ゆらーって！」

「落ち着け。そして、自分の格好を確認してみる」

ソファに横たわったままのハイクはそちらを見もせず、実に冷静な声で唱えた。

しかしながら、その指摘はサティの混乱という火に油を注ぐ行為そのものだった。

何か大事なことを想起したかのようにサティは急停止し、装備状態○になっている自身をゆっくりと見下ろす。

青ざめていたサティの顔色が、一息に赤くなった。

「いやあああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

赤面するサティは甲高い悲鳴を撒き散らしながら、速攻でバスルームに駆け込んでしまった。

エロチズムな発言を繰り返すわりには、裸は恥ずかしいらしい。

両耳に指を突っ込んで鼓膜を守っていたハイクは瞳を開き、呆れと疲弊の混じった表情で、やおら身を起こす。

「年中無休で騒がしい奴だな。ていうか――」

「うきや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ！」

「やつぱりな」

再び青ざめてリビングに転び逃げてきたサティに向かい、ハイクは辟易しながらも自身のパーカーを無造作に投げかけた。

演技なら大したものだが、彼女はとも素の混乱を起こしている
ようなので、ハイクは仕方なくソファから立ち上がった。

床にへたれこむサティの横を素通りし、シヨルダーホルスターに収まるリボルバーを構え、警戒しながらバスルームに向かう。

そこで微かに『第三者』の気配を悟った。

脱衣所に踏み込むと、気配はより濃くなる。

しかし、ハイクは静かな違和感を拭えなかった。

（これは……寝息か？）

殺気を感じない。

何者かは知らないが、侵入者にしても無防備すぎないか。

余計に用心する。

意に介さずリボルバーの引き金に触れている指先に神経が集った。
「そこに誰かいるのか」

スモークのかかった扉越しに声をかけるが、もちろん返答はない。
ハイクは息を止めて三秒数えると、バスルームの中へ一息に飛び込んだ。

全方位に素早く銃口を向ける。

「なっ」

気づいた時には、もう遅い。

ハイクは驚きの声を発していた。

彼の視線と銃口が、湯を張っていないバスタブに釘づけになる。

大人が四人同時に入っても（そのようなシチュエーションはちょっと不可解だけれども）窮屈を感じることはないであろう浴槽の中身は、けれど空っぽではなかったのだ。

その中に丸まって寝ている一〇歳前後の少女がいる。

彼女の全身を覆う長い黒髪を、ハイクはそう簡単に忘れたりはない。
ない。

「どうしてここにお前がいる……？」

自問にも似た言葉。

それに呼応するかのように、少女は寝返りを打った拍子に目を覚ました。

上体を起こして寝ぼけ眼をこすりながら、双眸を丸くするハイクとリボルバーの銃口を見上げる。

くすんだ朱色と、宝石のような碧。

そして——オッドアイの少女は微笑みを咲かせた。

まるで安息の地を見つけた天使のように。

泉の都に辿り着いた砂漠の漂流者のように。

微かに端つこが欠けた月が、雲一つない夜空に円光を放って浮かんでいる。

淀んだ空気が循環する地上に銀色の光がこぼれ落ちる、そんな静かな夜だった。

現時刻より早朝の八時間後まで列車が停まる予定がない『世界鉄道』の、広大なプラットホーム。

そこに夜間警備員の姿はなく、代わりに不穏な人影が複数蠢いていた。

民族を思わせる凝った衣装を羽織り、一様に木製の仮面をつけている者たち。

——銀狼の青年チエスター「セドリツクを筆頭とする一派。ここにいる者だけでも二〇体以上。」

けれど、それだけがチエスターの率いている全勢力ではない。

彼が束ねているのは、およそ五〇体の若い銀狼たちだ。

「どうだ。匂いは読めたか」

チエスターが仮面をしているとは思えないほど、よく通った声で訊ねた。

それに仮面を外して答えたのは、昼間ハイクと交戦した銀狼の少女——スカリーだった。

「残留している匂いの鮮度から推測し、すでに『原罪』がこの場から離陸して半日が経過している模様です。今から追いつくのは困難かと」

チエスターは淡々と応じるスカリーを仮面の下から一瞥し、

「たくつ。しかるべき準備を整えて姫様を迎えにきたつてのに、これじゃあ肩すかしだ」

「しかし、追跡が不可能というわけでもありません。『世界鉄道』は世界最速ではありませんので」

人々の間では、『世界鉄道』は異国への移動手段というよりも、『列車による旅そのものを楽しむ乗り物』として認識されている。

おまけに料金上、乗客はおのずと資産家が多くなってしまう。
そのため列車は安全性も含めて徐行運転を心掛けているのだ。

「んで、俺たちの移動手段の手配は？」

「すでに」

「けっこう。お前はいつも仕事が速くて助かる。だが……」

チエスターはやや右斜め上に顎を傾げて、仮面の内部で鼻をひくつかせた。

「嗅ぎつかれたな」

「？」

スカリーが怪訝な顔をした直後、彼女の後頭部を狙って飛来したナイフが突き刺さった。

否、月明かりを反射する銀色の切っ先が貫通したのは、スカリーの頭部ではなく彼女の後頭部に素早く腕を回した、チエスターの右手の甲だった。

チエスターは痛がる様子もなく右腕を戻し、缶ジュースの栓でも抜くような気軽さで手に突き立ったナイフを抜き取る。

スカリーは少し驚いた様相で目を見開き、振り返った。

そこに対峙するのは、闇に溶け込む黒服の男たち。

この街を縄張りとして生きるマフィア風情の吸血鬼たち。

「宣戦布告もなしに凶器を投擲して闇討ちたあ、とんだご挨拶じゃねえか。おかげで今、大切な同胞を失いかけたぜ？」

チエスターは自身の鮮血が付着するナイフを手中で弄びながら、あくまでも冷静な声で挑発した。

けれど、仮面に隠された表情までは、獰猛に彩らずにはいられなかった。

チエスターの背後に集結した二〇体の銀狼たちも同じ形相をしている。

「犬もどきが、こそこそと私たちの土地で何を嗅ぎ回っている」

先頭に立つ黒服の吸血鬼が温度のない口調で訊ねた。

対話する相手が人間だろうが吸血鬼だろうが、ここで仮面を外す

のがチエスターの流儀だったが、向こうが何の予告もなしに攻撃をしかけてきたので、わざわざ顔を晒す義理もないと彼は判断した。「いやいや、あんたには無関係な事情さ。こっち側のトラブルでな。なに、心配しなくても吸血鬼様に迷惑をかけるつもりはねえよ。捜しモノをしてるだけなんだしょ」

「ほう、それならこの時間帯にプラットホームを巡回する予定だった警備員数名が、どこに行ったか言えるのか？」

「別に殺しちやいねえさ。一般の人間だったし、俺たちも無益な殺生は好かねえからな」

「利益になる殺生は積極的になるのか」

チエスターは面白い冗談でも聞いたかのように、肩を揺らして低く笑った。

「そう揚げ足を取ってくれるなよ。見逃してくれねえかな。この街の空気が、わりと嫌いじゃねえんだ」

「『原罪』を捜しているんだろう？ チエスター」セドリック

チエスターは感心したように口笛を吹いた。

「情報が漏洩してんじゃねえか。俺の名前までバレてらあ」

「おそらく私たちが取り逃がした吸血鬼の少年が、彼らと通じていたでしょう。不覚です。『原罪』を奪われたばかりか、この行動段階で吸血鬼に干渉されてしまうとは。……チエスター、全て私の責任です。申し訳ありません」

自責の念に重く言葉を吐くスカリーだったが、それとは対照的にチエスターは仮面の下で無邪気に笑った。

「はは、良いつて良いつて。気にするなよ、スカリー。ここで吸血鬼の集団が一斉に湧いてきたっつーことは、ミリス＝メリー紫色の魔女の『予言』通りにシナリオが進んでるって証拠だ。ま、少し早いご登場のような気もするが、俺たちの計画に支障はない」

紫色の魔女ミリス＝メリー。

その名を聞いた瞬間、めったに表情も変えず、口応えも不満も唱えないスカリーの顔色が不服そうなものに変じた。

チエスターは彼女の微細な感情の変化に気づいていたが、あえて触れることはせず言葉を続けた。

「それによ、俺らみてえな『部族を抜けた銀狼集団』でも、流儀は通さずにいられねえタチだろ？ 戦をするからにはリスクと報酬をかける天秤がある。勝者に戦利品が与えられんのは当然の摂理だ。あの場で撤退し、『原罪』を置いて行かないや俺は逆にお前を許せなかったかもしれねえ。まったくもって面倒な思想とプライドだが、もはやDNAレベルで染みついてんだから、どうしようもねえさ」

「……ありがとうございます」

さて、と区切りをつけて、チエスターは改めて吸血鬼たちと睨み合った。

「マフィアもどきの吸血鬼の皆さん。俺たちに要件……っか言いたいことがあるだろ？」

「お前たち全員を拘束する」

「それでそちらさんに何の利益が出るのか知らねえが、嫌だと言ったら？」

チエスターが下から探るように訊ねると、

「殺害も辞さない」

「おいおい、あまりにも冷たい態度じゃねえか。吸血鬼はいつの時代も俺たちに対して差別的だ。ただ単に銀狼だからって理由で、俺たちを蔑む」

「お前たち全員が同胞から指名手配を受けていることは知っている」
「……じいども、吸血鬼に情報を売りやがったな。そこまでして俺たちを捕まえたいのかね、まったく」

チエスターが舌打ちをするのと同じ、彼の後方から前方に向けて空気が圧縮するように張り詰めた。

同胞たちが吸血鬼を目の前にして殺気立っているのだ。

いや、チエスターからしてみれば、今の今まで『衝動』を押し殺していた方が不自然なくらいである。

銀狼から殺意を受け取った黒服の吸血鬼たちも、一斉に懐へ手を

差し込んだ。

こちらが攻撃性のある挙措を示した途端、そこから物騒な獲物が飛び出してくるのだろう。

「抗争か。それも一興だが……」

チェスターの言葉に対応するように人狼側が姿勢を屈める。

しかし、

「残念ながら、人間の真似ごとに現をぬかす連中に構ってる暇はねえんだ」

こんなところで戦力を減らすのは非合理的だ、とチェスターは仮面の中だけで呟く。

「それじゃあな、吸血鬼の皆さん。俺たちがこの街にくることは二度とねえだろうよ」

言い残し、強靱な脚力でもって跳躍するチェスター一派。

闇夜に紛れるように散開し、駅ホームを去る。

チェスターの後ろから、すぐに銃声や風を切る音が追いかけてくるが、すでに弾丸の射程内から離脱しているためヒットはしない。

（そうだ。マフィアを気取る連中と対敵するのは、この街なんかじゃねえ）

ミリーズ＝メリー。

あの紫色の魔女の『予言』によれば。

6 | その時。タイムリミット

「女性の買い物に付き合うのは苦手だ……」

苦手分野がまたもや発覚してしまった吸血鬼ハイク「R」セカンドは、手持ち無沙汰な様子で試着コーナーの隅に突っ立っていた。故郷を旅立つてから一日目の朝。

『世界鉄道』の後部車両で運営されているレストランのモーニングで軽く腹を満たした後、さらに後方の車両にある百貨店で、ハイクは取り合えず『三人分』の生活必需品を購入した。

こうして恥ずかしげもなく外出できるのも、列車内にハイテクなオンラインモールのシステムがあったおかげである。

ここには『世界鉄道』専用のインターネット回線が構築されており、部屋に支給されているパソコンからサイトにアクセスして注文すると、商品を自室まで無料配送してくれるのだ。

何度も言うようだが、『世界鉄道』は東大陸にある様々な国を横断する列車である。

となれば必然、車両内は常に他国の文化が混沌することになる。いちいちカルチャーショックを受けていたら身が持たないだろう。ゆえに、奇抜な民族衣装なら異国文化として受け入れてもらえる。ラフな格好だって全くもって許容範囲内である。

おそらく若者ならジャージ姿でぶらっつこうと、スウェットでほっつこうと、お咎めは食らわれない。

せいぜい呆れ半分の眼差しを浴びるくらいだ。

だが、ベクトル不明なコスプレ衣装（ほとんど半裸）だけは駄目だった。

決して車掌に注意をもらったわけではないが、昨日、他の旅客と通路で擦れ違ったところ、

「見て見て、あの女の子。すっごい格好」

「ほんと、いわゆるコスプレってやつ？　ちょっと恥ずかしくて一緒に歩けないよね。特にこんな場所では」

「だよねー。ほら、隣を歩いてる男の子の顔も見てよ。すっごく涼しげな表情だよ。あそこまで神経が図太くならないと、きっとコスプレの相棒は務まらないんだね。羞恥心とかないのかな？」

「ないんじゃない？　真横に半裸同然の異性がいるのに、まるでそれが当然のように……むしろ胸を張って歩いてない？」

「言われてみれば、自慢げな顔にさえ見えてきたよ。もしかすると実は男の子の方がそういう趣味なのかな。彼女に無理やりあいうのを着させて、正装する大人が多い場所を威風堂々と一緒に歩いてもらうとかいう、そんな危険なプレイなのかも」

「きつと、あの衣装も男の子が作ってるに違いないね。異国文化、恐るべし」

……などという許されざるヒソヒソ声が聞こえてきてしまったら、もうハイクとしては黙認するわけにはいかない。

なぜか最終的にサティからこちらに注目が向くのも腑に落ちなかった。

悪目立ちしたところで得なことにはならないというわけで、昨夜のうちにインターネットを利用して、サティ「ループと『ララ』の服装をまともなものに強制転換した。

旅行列車とは言えど圧倒的に正装する成金の割合が多い『世界鉄道』列車内でも、せめて不審がられずに歩ける衣類を身繕ったのだ。いくら正々堂々と切符を購入して正規ルートをパスしていると言っても、外見が変人奇人ならそいつは変人奇人としての眼差しを投射されるからである。

そうした白い目線に晒されないためにも、ハイクは二人にサイズや形状などを無視した衣服一式を与えた。

のだが、そこでアクシデントが起きた。

サティがその服にケチをつけ出したのだ。

やれ可愛くないだの、やれ美しくないだの、やれこんなダサいの

は私には似合わないだの。

サティのファッションセンスには首を捻るしかないのだが、彼女には彼女なりのこだわりがあるらしい。

再び工事用ヘルメットをかぶり直そうとしたコスプレイヤーに、ハイクは洪々『後で好きな服を買ってやるから、それまでは頼むからそいつで我慢してくれ。いや、我慢して下さい』という契約を申し出て、交渉成立。

試着している女性二名を、ショップの隅っこで待っている次第である。

「お客様、とってもお似合いですよ」

「そ、そうですか？　へへ、私にはちよつと大人過ぎる気がしないでもないですけど」

「いえいえ、そんなことはありません。もうばつちりです。お客様はシンプルな方が映えるタイプなので、変に気張ったりせずこういう薄いピンクのカットソーにショートパンツ、さらには当店オリジナルのこちら！　カーディガン風味のダークグレー系ジャケットを肩に引っかける感じで足すと、ほら、三六〇度完璧です。ついでにこの野暮つたいメガネも除装しちやいましょう」

「おお、確かに私じゃないみたいですよう！　新たな局面！」

「でしょう？　これで振り向かない異性はいませんよ」

「へへ、そうですねー。でも今まではオスだけではなく、万人の目を惹きつけていた私からしたら、少しだけ地味な気もするんですが」

サティの興奮気味の声が届く。

工事用ヘルメットに革ジャン水着の変態時代からすれば、普通の格好をするだけでも見栄えは良くなるだろう。

もともとは素材が良いのだから。

というか、サティが感じていたのは万人の『珍妙なイキモノを見るような目』の間違いだ、間違いなく。

「……流されるまま、もう取り返しのつかないところまできてしま

った気がする」

鉛みたいな重い溜息をつく。

昨日と今日で吐きすぎて、不幸も不幸を恐れてそろそろ寄ってこないかもしれない。

そんなことを嘆かわしく思いながら、ハイクは遠巻きに彼女たちの様子を眺めつつ、昨夜の出来事を回想した。

∞ ∞ ∞

ゆるやかに後方へと流れ続ける車窓に映る風景は、すっかり陽が落ちて暗くなっていた。

もし今が明るい時間帯ならば、窓の外に雄大な青い海と地平線も望めただろう。

「と、いうわけだ」

『世界鉄道』二両目一〇七号室のリビング。

ソファに腰かけるハイク「R」セカンドは、自身の歴史について淡泊に言い終えた。

もう色々と面倒臭かったのでサティに自身と妹が、本物の吸血鬼であることを打ち明けたのだ。

そして、サティの反応はハイクの予想以上に予想通りだった。

ハイクに騙されていたことよりも、新事実に対する驚きで一杯一杯のようで糾弾してこなかったのだ。

ここでハイクの言葉を安易に鵜呑みにせず、それ相応の怒りでも覚えれば、まだ学習能力の向上も見込めるだろうが、もはや期待はない。

コントロールする側としては楽で良いのだが。

ソファの差し向かいに座るサティ（装備品バスローブ）は、未確認飛行物体の群れを満天の夜空の中に発見した子供のようなはしゃぎ具合で、声を張り上げた。

「つまりつまりつまり、あなたとシリカさんはやっぱり私が睨んだ

通り吸血鬼で、さっきのオッドアイの子は、あなたたち吸血鬼と人狼のハーフだというわけですね!？」

「理解してもらえて何よりだ」

「ああ、なんてステキファンタジック!」

恍惚とした表情を浮かべるサティの不謹慎さにハイクは渋面を作りつつ、ベッドルームの扉を一瞥した。

今頃ツインベッドの片方で眠りにについているであろう、名前も知らない『劣血』の少女。

バスタブで再会した瞬間、彼女はオッドアイの瞳でハイクの顔を認めるなり、こと切れたように意識を閉ざしてしまったのだ。

精神面と肉体面の疲労によるものだろう。

詳しい事情など知る由もないが、あの人狼たちからの逃亡生活を送っているのならば、心身にかかるストレスはどれほどのものか。

「あの子の傷を確認してきたんだろう? どうだったんだ」

「あなたの言う通り、彼女の体に傷なんて一つも見当たりませんでしたよう。あなたが罪もなき一〇歳の幼女に対して無慈悲に銃を発砲したという絶対無二の証拠も」

「……事実だから言い訳するつもりはないが、たった今話を聞いただけのお前にそこまで言われると腹が立つな」

「正論だけに?」

論破したぜと言わんばかりにニヤつくサティ。

今度こそ銃弾をかましてやろうかと思っただが、ハイクは極限の理性でもって、それを自重した。

このまま衝動に駆られて死体を生まないように、熱くなった思考を冷やしつつ、

（吸血鬼と人狼のハーフ。やはり人狼の治癒能力も備わっていたようだな）

女性であるサティに確認してもらったことだが、昼にハイクが銃弾で穿った彼女の右膝の銃創は、すでに癒えているようだった。

メンタル面はともかく、身体的な傷の治癒力は言うに及ばない。

あの程度の軽傷ならば、一〇時間もしないうちに皮膚が生まれ変わって消えるだろう。

（だが……）

それとは無関係に不自然だ、とハイクは思う。

（何だつて俺に向かって、あそこまで心の底から安心した表情をする？）

先程の邂逅だけではない。

『世界鉄道』の駅構内でも、彼女はまるで行き別れた肉親と再会でもしたかのように、過剰なまでにハイクに縋りついてきた。

ハイクは彼女がより安全に、より速く病院に運ばれ匿われるようにリボルバーの引き金を絞った。

けれど撃たれた側としては、あれほどの横暴は堪ったものではないだろう。

治癒能力の高さと痛覚は全く別物なのだ。

ハイクを憎んだとしても不思議ではない。

なのに、彼女はハイクに膝を撃ち抜かれてもなお、瞳の中の希望を捨てなかった。

気づいたからだ。

彼女は。

あの状況で。

ハイクの良心に。

（異常なのは、それだけではないが）

ここでまたもや彼女に会ったことを、偶然と言って思い過ごしには無理がある。

なにせハイクが部屋を予約する際、ここは空白だったのだ。

ハイクはわざわざ相部屋などしない。

だというのに、蓋を開けると先客に彼女がいて、しかもなぜかバスタブの中（狭いところが好きなのだろうか、あるいは安心しないとか？）、小さな手に切符を握りしめていた。

この部屋番号のコードが刻印された『永久切符』を。

さらに、サティに頼んで彼女の衣服を漁ってもらったところ、内側のポケットから残高の減ったマネーカードと彼女の——おそらく偽造——パスポートが出てきた。

ハイクが治療費や入院費として無償で渡した、あのマネーカードと共に。

彼女も幼いとは言え人狼の特性を持っている。

意図的に気配を消すのはお手の物だろう。

ついでに優れた視力と聴覚があれば、ハイクたちの会話ややり取りから、この部屋番号も割り出せる。

あの厳重な書類チェックはハイク一人で済んでいたので、パスポートさえ所持していれば受付は突破できる。

一年分の入院費という巨額が登録されたマネーカードを『永久切符』発行に投資すれば、彼女がここにいること自体に矛盾はないのだ。

だが、そこで新たな疑問にぶつかる。

それは動機。

ここまでして、彼女がハイクを追い掛けてきた理由が分からないのだ。

∞ ∞ ∞

そうして、目覚めたのが今朝。

ここまできたら追い返すのも不可能だと諦めたハイクは、他人の貯蓄を食い潰す気満々のサティと共にレストランで朝食を摂りながら、『劣血』の少女にイエスカノーで質問に答えてもらった。

まずは名前を訊ねた。

なんとなく予測はしていたが、返答はノーだった。

言葉も話せず文字も書けないから『答えられない』という意味で、少女がかぶりを振った。

——とサティは思ったらしいが、そうではない。

ないのだ、名前が。

そこで便宜上、パスポートに記載されている『ララ』という名で呼ぶことになった。

次に年齢。

外見は一〇歳前後だが、実年齢は定かではないという。

ララは小首を捻りながら、自信なさげに小さな十指を全て広げて答えた。

それから気分が重くなる質問を繰り返していると、ララの自覚が確認できた。

無論、彼女自身が吸血鬼と人狼の間に生まれた『劣血』であることを、だ。

もしかすると、ララが言葉を話せなかったり文字が書けないのは、血の交わりではなく肉体面の異種結合による弊害なのかもしれない。なお吸血鬼としての能力、つまりハイクと同じく何かしらの瞳術を有しているらしいのだが、彼女のジェスチャーだけでは要領を得ず、意味を捉え切れなかった。

一体、小指の先がどうしたというのか。

他にも、これまで人狼たちに監禁生活を強いられていたこと。

何かのきっかけで、ここまで逃亡してきたらしいことが判明した。ララの意味表示が体の動きだけに限定されていても、質問の仕方によっては、もっと詳しい事情を浮き彫りにできるだろう。

『人狼たちによる監禁生活』という情報を得たハイクは、そこで推論する。

ララは人狼の遺伝子情報を得ていながら、吸血鬼の血液情報も合わせ持つハーフだ。

人狼側としては『原罪』と呼称するほどに汚らわしく忌々しい存在。

けれどハイクの中では、一つの考えが浮上していた。

昨日、交戦した人狼たちはララを『抹殺』ではなく、『拘束』しようとしていたのではないかと。

それは吸血鬼を誘い出す図、もしくは人狼たちにとって利用価値のある瞳術を所持する彼女を連れ戻しにきたとも推測できるからだ。人狼にはない、吸血鬼専用の瞳術。

ララの能力がいかなるものか、今のところハイクに知る術はない。だが、人狼にとって利益の出る瞳術があるのなら、彼らがララを殺さずに重宝するのも手だろう。

手元に置いておきたいララが自分たちの檻から逃げ出したともなれば、追うのも当然の行動だ。

（もし……昨日あの駅に俺がいなければ、あいつは……）

また監禁生活に戻っていたのだろうか。

ララはそこで一体、どのような暮らしを送っていたのだろう。

不自由はなかったのか。

寂しくはなかったのか。

辛くはなかったのか。

外の世界を望まなかったのか。

いや、それらは愚問だ。

だからこそ彼女はここにいるというのに。

「ララちゃんの方は、こんな感じのコーディネートでどうでしょうか？」

と、いきなり店員に声をかけられ、精神的タイムスリップを果たしていたハイクは、目の前に意識の焦点を合わせて現在に回帰した。そこに物腰の柔らかい二〇代後半頃の女性店員と、例の少女がいた。

吸血鬼か人狼か人間か外見では区別がつかないため、店員もララを人間の女の子と見て接している。

しかし、口がきけないことを事前に教えておいたので、保護者扱いされているハイクに一応訊ねにきたのだろう。

ハイクは店員に軽く会釈をして、何やらもじもじと下を向いて照れ臭そうにする黒髪の少女に目をやった。

店員に勇気づけられるように背を押された彼女の服装は、わりと

カジュアルだった。

ベージュ系のシンプルなハンチング帽。

編み目が強調されているUネックのグレーニットの下に、控えめなレース地がフェミニンな印象をプラスしている白いブラウス。

ひざ丈スカートはトレンチコート風味で、そよ風に吹かれているかのような、ふんわりとしたシルエットを浮き彫りにしている。

薄めのキャラメルカラーだ。

他にもソックスやブーツ、おまけにネックレスまで。

一〇歳前後の小娘が、ませている気もするが清潔感があって全体的にバランスの良い服装に仕上がっている。

ハイクは作り笑顔を浮かべて言う。

「ええ、とても似合っていると思います」

半分は社交辞令みたいなものだったが、それでもララは嬉しそうな顔で店員を見上げた。

店員はそんな彼女に上手なウインクを返していた。

しかしながら女性の買い物というものは、まったくもって恐ろしい。

初日から手酷い出費を食らってしまった。

二人分の衣類一式が、一週間分の食料代を軽く凌駕するのだから戦慄せずにはいられない。

「こ、これが常識なのか？ シリカも衣服にこれほどの額を投入しているのか？ そう言えば、あいつはいつもお洒落だった気がするな……」

ハイクはこの世界旅行を実現するために蓄えた莫大な資金を所持している。

しかし、財布の紐を解いた奥は決して無限大ではない。

この調子で後先考えずにバンバン使い続ければ、一年後にハイクの用意した旅行費は底を尽きてしまうだろう。

かつてはマフィアのボスとして、父が作り上げた吸血鬼の組織を束ねる立ち位置に君臨し、甘い汁を頂いていたわけだが、今は単なる旅鳥。

働いているわけでもないのに、ハイクの口座にある金額が全てなのだ。

（まあ、一年後の『その時』がくるまでの問題だ。上手いことやりにすれば、タイムリミットまで維持できるだろう）

その時。

タイムリミット。

聞く者に焦りを抱かせるそんな言葉が示唆しているのは、言うまでもなくハイクが血液中に患った不治の病——『黒血病』である。血管を流れる血がドス黒く変色していき、やがてはコンクリートのように硬化してしまうという、吸血鬼特有の死に至る病。

治療法もなければ予防策の糸口すら見出せていない、薬剤投与による延命さえ望めない奇病。

人間の医師をやっている傍ら、密かに『黒血病』の処方研究を独学で進めているという知り合いの吸血鬼によれば、ハイクの余命は現在からたったの一年らしい。

発覚したのは一年前。

医師会に籍を置く知り合いの吸血鬼の自宅で——こういう言い方をすると滑稽かもしれないが——吸血鬼専用の健康診断を組織全体で受けた結果、『残り二年』と告知されたのだ。

ファーストステージ
初期段階で早期発見しようとも、一度血液の内部で発症したらお終いと恐れられる死神のような病に対し、ハイクは諦めを含めた『妥協』に達するまで相当に苦悩した。

それでも、今は何とか達観できていると自負している。

それはなりたくもなかったマフィアのボスという肩書が消え、晴れて『時間制限つきの自由』を手に入れた旅鳥となれたからかもしれないし、フォースステージ死期段階まで吐血などの自覚症状が出ない特性のおかげなのかもしれない。

それに些細ながらも、救いがなかったわけではない。

発病者を絶対的死に追いやる『黒血病』は、遺伝病や感染症の類ではないと判明しているのだ。

それは吸血鬼の歴史も微力ながら証明してくれている。

よって同じ親から血を分けた妹や、同じ空間で長く過ごした同胞の吸血鬼たちが、自力で発症しない限り、この恐ろしい病に苦しむことはないのである。

少なくともハイクから彼女たちの生命に迷惑をかけることはない。（不幸中の幸いだな。すでに一年後の未来を失っている吸血鬼なんかのせいで、これ以上妹たち^{あいつら}の手を煩わすのだけは、ごめんだ……）発症する原因がまだ未知数なのは不安だが、もはや非力なハイクにできることは、妹やファミリーに負担をかけないように、彼女らの未来を食い潰さないよう、街を離れて世界中を旅しながら、ひたすら静かに息を引き取ることくらいだった。

そう、波風が立たない湖水のように穏やかでゆつくりとした一人旅を。

「しかし面白いですよね」

そんなハイクの儚い願望を粉々に打ち砕いた人物が、眼前でマルゲリータピザを両の頬に目一杯詰めて、もふもふと摂取していた。

日用品の買い出しが終わり、ちょうど昼に差しかかったのでハイクたち一行は、両手に下げる買い物袋を部屋へ置きに帰ってから、ランチを食べにレストランが密集する後方車両に遠征し直したのだ。そこでランチサービスをやっているバイキング形式の店に（サティが一目散に）突入し、円卓を三人で囲みながら昼食にありつく運びとなった。

店内は随分と開放的だった。

四〇卓ほど等間隔で配置されている席はほとんど埋まっていて、活気づいている。

客層は旅行列車ということもあり家族連れが多いが、子供たちの教育が良いのか全体的に落ち着いていた。

天窓から差し込む温かな陽光を取り入れたエコ照明と、モダン風味の小奇麗な内装。

天井では白いファンがゆっくりと回転している。

店側の小粋な計らいで、ちょっとしたステージにてジャズバンドがBGMを演奏してくれている。

ミドルテンポの耳触りが良いインストルメンタルが、店内をほどこよい賑わいに包み込んでいた。

なかなか洒落た演出だ。

良心的な料金も含め、ハイクとしては決して嫌いではない雰囲気のレストランである。

「いや、ずっと私なりに考えていたんですけどね」

「行儀が悪い。食うか喋るかりボルバーの銃弾を食らうか、どれかにしろ」

早食い女は慌てて口に含んだピザを飲み込んだ。

サティは隣に座るララがサンドイッチを矯めつ眇めつ不思議そうに眺め、恐る恐る頬張ってから電撃に撃たれたみたいに双眸を見開いて、もぐもぐと美味しそうに咀嚼する様子を横目で一瞥し、

「ざっくり整理しますと、つまり吸血鬼は私たち人間社会の流れやシステムを模倣した上で、その中に潜伏するように溶け込んで生きている人外の種族ってわけですよ。それって今、どれくらいいるんです？」

「全体の数なんて俺にも分からないが、現存している数はそう多くないだろうな」

ハイクはスプーンとフォークで絡め取ったカルボナーラを口に運んでから、答えるのも億劫そうな調子で応じた。

「吸血鬼から嫌味で『絶滅危惧種』なんて揶揄される人狼のように、極端に少ないわけではないが、それでも人類の繁栄した数には遠く及ばないだろう」

ハイクはサンドイッチがお気に召したらしい『劣血』少女の横顔を盗み見てから、すぐに視線をサティの方に戻し、声を潜めて言葉

をつけ加えた。

「生き残り、という表現が過言ではないくらいにはな」

「要するに、人間や人狼に正体がバレないように巧妙な工作で、上手く周りを騙して世に紛れ込んでいるのが現代の吸血鬼だ、と」

「人間にとって吸血鬼は、非現実的な世界に生きるファンタジーのバケモノだからな。昨今の創作物がその概念を肯定している。証拠と共に吸血鬼の存在を公表しても、社会に余計な混乱を招くだけだ」

吸血鬼は夜を統べる負の象徴。

人類の間ではその固定観念が強い。

吸血鬼の存在を受け入れさせた上で、そのイメージを覆すのは、ちよつとやそつとの活動では不可能に近いだろう。

ゆえに現状が最善なのだ。

現代の吸血鬼が人間になりすましている状態が。

そのせいで医師を務める吸血鬼たちが医学界で表立せず、『黒血病』の研究が滞っているのだとしても。

「俺たち吸血鬼は一見、人間そのものだ。見分けなんてつかない。

お前もシリカに告白されたりしなければ、俺が吸血鬼だなんて思いもしなかったはずだ」

「はい、間違いありません」

「いや、『俺は吸血鬼だ』とカミングアウトされたからといって、それを真正直に信じるのも大きく間違っているんだが」

「あなたは、どこからどう見ても普通の人間ですよ。昨晚なんか吸血される気満々で全裸待機してたのに、あなたは一向に襲ってきませんでしたし」

こういう言動にいちいち反応するのもそろそろ疲れてきたので、ハイクは半眼でサティを見やり、軽い溜息をつくだけに留めておいた。

「……で、実際に吸血鬼を証明してしまうと、昨日は調味料を分けた隣人を今日は吸血鬼なのではないか、と疑う事態が発生するわけだ。疑心暗鬼による『吸血鬼狩り』の二の舞になる。いや、近代化

した今ならもつと複雑で最悪なことにもなりかねない」

「複雑な？」

「ジェノサイドとかな。だから、俺たち吸血鬼はこういう生活に行き着いたんだろう」

ふーむ、とサティが深く考え込むような仕種をしていると、ふいに彼女の服の袖をララが横から遠慮がちに摘まんだ。

見るとララのトレイが空っぽになっている。

ハーフの少女は、サティに負けず劣らず食欲旺盛のようだ。

サティはララの所作だけで理解し、食事と会話を中断して席を立った。

ララの小さな手を姉のように引いて料理の並ぶ方へ向かう。

人狼の間でどういう扱いを受けながら監禁されていたかは定かではないが、どうポジティブに思考しても、ララの待遇が良かったとはどうしても思えない。

このような場所で食事をするのも、初めての経験だったかもしれないのだ。

勝手が分からなくて、サティを頼るのも無理はない。

……基本的に人狼は吸血鬼を呪っている。

個人個人が抱いている恨みつらみではなく、種族単位の怨恨だ。

そして、ララがいくら人狼の遺伝子情報を有しているとは言え、その中には吸血鬼の血が混ざっているのだ。

古来、自分たちの細胞が神聖なものだと信じてやまない人狼の種族は、吸血鬼の憎い血をその身に宿すララに対し、同胞並みの良い感情は抱かないだろう。

だとすれば監禁を強いられていたララにとって、この環境は不慣れなもの、と考えるのが自然だ。

例えば、生粋の田舎者が何の予備知識もなしに大都会に無一文のまま解き放たれた状況より酷いかもしれない。

そんなことを考えながら野菜たっぷりのミネストローネを飲み干しているうちに、彼女たちが席に戻ってきた。

「しかし、おかしいですね」

席に着くなり、脈絡なく怪訝そうに首を捻るサティ。

「何がだ」

「どうして私の色仕掛けが、あなたには通用しないんでしょう」

「残念ながら俺は吸血鬼だからな」

いつもは呆れながら適当にあしらう種類のサティの疑問に、ハイクは珍しく取り合って回答を提示した。

「どういう意味です？」

サティは身を乗り出して興味津津といった体で訊ねた。

ハイクはこめかみの辺りを人差し指でポリポリと掻きつつ、間の抜けた表情で応じる。

「人間には興味ないんだ」

当然のようにそう答えると、サティはぱちぱちと何度か瞬きし、やけに得心した様子でポンと縦に拳を叩いた。

「なるほど。あれですか、それは三次元には興味がない的な言い分と同類ですか？」

「は？ 三次元？」

人間は三次元以外にも『そういう興味』を示す対象があるのだからうか。

そう言えばオタクとかいう特殊な職業(?)のカテゴリーに属する人間は、二次元や一次元とかにも発情するとかしないとか耳にした覚えがある。

少し理解しがたい。

あれを対象にどうやって繁殖するつもりなのか。

「奥が深いな、人間の心理は」

「ちよつと勘違いしてるようですね……」

「しかし、俺の場合はあくまでも三次元の話だ。例えば……」

ハイクは比喻を用いようとして空中に視線をさ迷わせる。

すると一瞬だけ、サンドイッチに小さな口で齧りつきながら、二種類の目でこちらを見つめる小動物じみたララと視線が合った。

「お前には好きな動物がいるか？」

「いますよう。猫より犬派なんです。飼ってたこともありますし」

「その飼っていた犬のことをお前は恋愛対象として見れるか？」

無理ですね、とサティは即答した。

「メスでしたから」

「おい、問題視するべきところを大きく間違っているんだが」

「冗談ですよ、チャッピーはオスです」

「いや、どの部分が冗談になっているのか理解できないんだが……」

俺の例え話が悪かったのだろうか？

ハイクがそんな風に思っていると、

「嘘ですよ。私はチャッピーを家族あるいは友達として見ていました」

「まあ、要はそういうことだ。ペットに愛情は注げるが、それは恋愛感情の類ではない。……世の中は広いし、オタクなんていう職人もいるくらいだから、『神様の証明』論理で否定はできないが、それでも特殊だろう。べつに人間をペットとか下等生物とか言って、見下しているわけではない。ただ、とにかく俺は他種族主義ではないんだ。人間の血肉には性的な魅力をこれっぽちも感じない」

「むう、ということは……ひょっとして私よりもララちゃんの方が一歩リードしてる？」

言葉を向けられたララは無邪気に小首を傾げた。

「その一歩は絶対に縮まらないがな。絶対越えられない一線は、なにせ種族の壁だ」

「世の中には幼女にしか興味を見出せない男性もいますからね。残念ながら私は美しく熟してしまった……」

「だから、種族の違いだと言っているだろうがっ」

自分の罪深さを無為に猛省しているサティに対し、ハイクは三白眼を向けて突っ込んだ。

と、何かを閃いたかのようにサティははっとして顔を上げる。

「あれ？ てことは何ですか。やっぱり私も吸血鬼さんに血を吸わ

れば、同じステージに上がれるという理屈では？」

ハイクは苦虫を噛み潰したかのような顔つきで、小さく舌打ちし、「そこに気づきやがったか。だが、人間を捨てるのはやめておけ、と親切心で忠告はしておく。お前には恋愛感情を抱かない自信があるから、無駄骨に終わるだけだ」

「それにしても、人間だから欲情しない、ですか。こんな食べ頃な美少女がいるのに、道理で見向きもしないわけですよ」

「異性に無関心なわけでもないが、俺は人間の男ではないんだ。価値観も少し違う。判断材料は容姿や性格ではなく、血の相性もあるからな。それに……」

「それに？」

「いや」

俺には後一年しかないから、と言ったらサティはどんな顔をするのだろう。

「そうですか。ま、私は血液型占いには詳しくないんで、割愛つと次の駅はどれくらいで到着するんです？」

「切り替え早いな。お前のそういうマイペースなところは尊敬に値する」

ハイクはまたぞろ嘆息を落とし、

「次は明後日だな」

明後日、この列車は国境を越えて次の駅に停まる。

そこが大きなチャンスだ。

一人旅に連れは必要ない。

サティは貯蓄を食い荒らすだけの身元不明な他人だし、ララにいたっては危険そのものを孕んでいる。

騙すようで二人には悪いが、次の駅で共に下車してもらうつもりだった。

停車駅は、ちょうど有名な観光地なのである。

誘導するには十分すぎる響きだ。

「明後日、ということとは、まだまだ時間はたっぷりあるわけですね」

「舌舐めずりをするな。何が言いたい」

「この『世界鉄道』には暇を作れないくらいの娯楽施設があるじゃないですか。有言実行、しましょう？」

どうやら、サティはハイクを『金のなる木』とでも思っているらしい。

まだまだ集られる予感がし、ハイクの片眉が痙攣気味に引きつっている、

「……」

ふいに、ララが拙い手つきでフォークとスプーンを駆使し、厚めにスライスされたローストビーフを自身のトレイから、ハイクのトレイの上に移動させた。

それはタイムサービスで一人一枚しかもらえない貴重なものだ。

「ローストビーフ嫌いなのか？」

そう訊ねると、ララは『分からない』とでも言いたそうな困った顔で俯いた。

サンドイッチさえ物珍しそうに食べていた彼女だ。

ローストビーフも口にすることがないのかもしれない。

「鈍感ですね、あなたは」

「？」

「ローストビーフ、大好物なんでしょう？」

ガタツ、とハイクの椅子が狼狽する音を發した。

「ま、待て。何故そのことを知っている。はっ、まさか寝言か？寝言なのか？」

「いや、あなたが夢に見るほどローストビーフ好きだったなんて、それこそ夢にも思いませんでしたけど、いつも仏頂面のあなたがローストビーフを食べている時だけは、表情をほくほくと綻ばせていましたから」

「顔に出ていた、だと？」

「ええ、それはもう気持ち悪いくらい幸せそうな顔でしたよう。頭がおかしくなっちゃったのかと思いました」

「無意識だ……」

自分の癖や表情とは、得てして他人に指摘されて初めて分かる時があるものだ。

「それでこれを俺にくれるってわけか」

ララは小刻みに頭を縦に振って肯定した。

不安そうな上目遣い。

まるで親切心をハイクに煙たがられるのではないかと心配しているみたいだ。

「そうか。それなら、ありがたくもらっておく」

我ながら子供相手に不器用な物言いだな、とハイクは自身の大人げない内面を毒づきながら、ほっと胸を撫で下ろしているララに厳しい口調で、

「だが、小さいうちから食わず嫌いになるのは、良くない傾向だ。せつかくの食糧を粗末にしてはならない。命の資源は有限なんだからな。それに、そうやって他人の顔色を窺ってばかりで、責任転嫁する癖がついたら厄介だ。世の中はお前に対して甘くない。それは身をもって経験しているはずだ」

「あ、あの、ララちゃんもそういうつもりで、やったわけじゃ——」

「だから、俺もお前のためにならない甘やかしはしないつもりだ。肝に銘じておけ」

サティが間に入って助け舟を出そうとしたが、ハイクは彼女に一瞥すら与えなかった。

途端、ララは親から叱られた子供みたいに肩幅を狭めて落ち込む。
(たくつ、一〇歳児の気遣いなんか苦手だ)

間一髪入れず、ハイクは何食わぬ顔でフォークとナイフを手に取り、ララからもらったローストビーフを半分に切り分けた。

「これ、食べるのは初めてなんだろう？　上手いから食ってみろ。俺のオススメだ。そして現実を知るんだ。でなければ、お前は生涯そのものを後悔する」

一七年も生きたとは思えないくらい下手くそな言葉だったが、そ

れでもララはトレイの上に戻ってきたローストビーフ二分の一を見つめ、

「……」

ハイクの目には確かに、その唇の動きが『ありがとう』と聞こえた。

7 | 脳裏に思い出されるのは、どちらも無邪気な笑顔だった

——じゃらじゃらピコピコばきゅんばきゅんドムドムずしんずしん——

自動ドアが左右に開けた瞬間、音と振動が雪崩のように溢れ出してきた。

圧迫感のある騒音に、ハイクは思わず両耳を塞いで顔をしかめる。大量のコインが衝突する高音や、腹の底を震わせるリズムミカルな低音、荷電粒子砲を連想するビームの電子音など、耳をつんざく様々な種類の音源が一面の壁となって押し寄せ、ハイクの聴覚をひどく摩耗させた。

「これが、ゲーセンか……」

しかしながらハイクの心中では、不快感よりも新鮮な気持ちが辛勝していた。

マフィア時代にこのような遊戯場に出向いたことがないからだ。

照明は基本的に薄暗い。

けれど個々のゲーム機から赤や青や緑や紫など、色取り取りのネオンじみた光源が発せられていて、がやがやと全体的にまとまりのない印象になっている。

ハイクは少し繁華街の夜を思い出した。

安価で商品を獲得するプライズゲーム。

モニタの映像をカーソルで操作する対戦格闘ゲーム、シューティングゲーム、レースゲーム、音楽ゲームなど死角はない。

メダルを利用した大人向けのギャンブルコーナーも、プリクラなる写真シール自販機ゾーンも存在した。

「あれは何だ？」

室内を見て回っていたハイクが、ふとゲームコーナーの一角に目を留めて呟いた。

一行は立ち止まり、巨大スクリーンの前で他のゲームコーナーよりも圧倒的な盛り上がりを見せる若者の集団に注目した。

巨大スクリーンの前には異様な物体が設置されている。

それは黒い卵型の機械だった。

人一人が乗り込める程度の大きさで、横並びに一〇機並んでいる。そのうち八機の外装には、蛍光灯のようなグリーンの紋様が浮かび上がっていた。

「このゲームセンターで一番の売りだそうですね。西大陸の科学都市『^{マリアリア}理想郷』の最先端科学技術と、催眠技術に応用し開発された体感型対戦格闘ゲーム。自身が創作上のキャラクターになって、格闘ゲームの世界を体感するといった内容らしいです」

入り口でバニーガールが配っていたパンフレットをばらばらとめくるサティが、ページに記載されている情報を読み上げて答えた。

「科学者の発想や追求心には際限がないな」

ハイクはサティの持っているパンフレットを横から覗き見た。

そこには黒い卵型の機械の写真と共に、ゲームの概要が綴られている。

専門用語が多すぎて脳科学に知識がないハイクには、熟読してもいまいち理解できそうになかった。

「要するに、あの機械の中に座って専用のヘッドセットを装備するだけで、リアルな異世界に飛べるというわけか」

「意図的に見させる白昼夢みたいなものですかね？ 特殊な電極で搭乗者を催眠状態にし、脳波のチャネルを科学的にリンクさせ、特殊な電波でパイロットたちの意識をオンライン接続する。科学的には安全が保障されているみたいです」

「……何でもかんでも先頭に『特殊な』だの『科学的』だのつけければ、良いと思っているのか？ 一見、説明になっているようだが、実は全然なっていないからな」

「だって意味不明なんですもん。科学は専門外なんですよう」

ハイクもサティのことを言えた義理ではないので、それ以上は突

っ込まなかった。

「一応、私たち外野も搭乗者たちの戦闘模様を観戦できるみたいですね」

サティが巨大スクリーンを指差して言った。

画面は等間隔に八つで区切られていて、それぞれが違うキャラクターの背後を映し出している。

市街戦の3D展開だ。

現在、戦闘シミュレート中なのは、四対四のチーム戦のようだ。

完成度の高いCGで構築された街中で、八人のキャラクターが激しく熱い闘いを繰り広げている。

ある者は箒にまたがって黒煙が立ち上る空を自由飛行しながら、地上に魔力の塊を落として爆撃していたり、そんな魔法使いに対して右腕に搭載する対空ミサイルを放つ汎用型のサイボーグがいたり、かと思えばそんなサイボーグの迎撃を邪魔しようと横合いから奇襲をかける屈強な人獣剣士がいたり。

「面白そうですね……ごくり」

「やりたかったらお前も最後尾に並べばいい」

スクリーン上を観戦する若者たちに目を向ける。

そこはあくまでも観戦区域のようだ。

あのゲームは人気らしいから、プレイするには順番待ちをしなくてはならないだろう。

だが、周囲に列をなしているところが見当たらない。

ハイクがきよるきよるしていると、傍らのララがパーカーの袖を引っ張って、目の前のポップ広告を指差した。

この脳内オンラインゲームのイメージキャラクターだろうか、魔法少女めいたアニメ調の女の子が等身大のディスプレイになっている。

ララは文字を書けないし読めない。

けれど、そこに情報があると判断してハイクに教えたのだ。

事実、その勘は冴えていて紙素材のポップには注意点が書かれて

いる。

「一見さんお断りの、完全会員制？」

つまり、このゲームに登録しているユーザーに招待されなければ、会員登録の資格すらないというわけだ。

「しかも前もってインターネットで予約しておかなければ、プレイできないみたいですね。ちょっとやじ馬たちに紛れて盗み聞きしたんですが、どうやら一週間先まで予約がパンパンだそうですね」

サティは不満そうに唇を尖らせた。

「大人気だな」

「それもそうじゃないですか？ あれを見てくださいよう。様々な呪文を駆使する魔法使いは、空だつて飛べるんです。あのプレイヤ―は今まさに擬似的に空を飛んでいるんです。あのデジタル世界ならファンタジーの設定を現実みたいに味わえるんですから」

「非日常への渴望か。ま、諦めて他のゲームで遊べよ。ほら、ララなんてもう他のに目星をつけている」

子供らしいというか、すでにララは脳内オンラインゲームの場から離脱して、見知らぬ親子が挑戦しているクレーンゲームを横から見守っていた。

「サティ。あれは、どうやるんだ？」

「簡単なボタン操作ですよ。クレーンを操作して、中の景品をキヤッチするんです」

「……あいつは、あの中のぬいぐるみが欲しいのだろうか」

「とても欲しそうにしていますが。……いえ、もしかすると、そうじゃないのかもしれませんが」

「は？」

「観察力を駆使してください。ララちゃんの注意はケースの中の景品よりも、あの親子のやりとりに照準されてる気がしませんか？」

言われて気がついた。

確かにララは、彼女と同じ歳くらいの少年と父親が、協力してクレーンを操作している様子そのものを見つめている。

その瞳の奥に、彼女は何を感じているのだろうか。

ララは自身の家族の姿を知らないらしい。

親がどういった存在なのか分からないのだ。

生まれた時から人狼たちの監視下にあったララは、本当にこの世界の何を知らないのだろうか。

むしろ、知っていることを数えていった方が数倍速い。

（無知。それは他者から見て悲惨なものだな）

その時、クレーンゲームに挑戦していた親子が歓喜の声をあげた。どうやら目当てのぬいぐるみが取れたらしい。

子供は幸せそうにぬいぐるみを抱え、父親とともにその場を離れていった。

そして、ララの形容しがたい眼差しは、その親子の背を追いかけていた。

「なあ、サティ」

「なんです、ハイク？」

まるで相棒の呼びかけに応じるように、サティは芝居臭い返事をした。

「あのクレーンゲーム、やったことはあるか」

「残念ながらありません」

「そうか」

ハイクは相槌を打ちながら、ララに歩み寄る。

彼女はまだ見つめていた。

どこからかアイスクリームを買ってきたらしい母親の元に駆け寄る少年の背を。

「どれか、このケースの中に欲しいものがあるのか？」

いきなり背後から声をかけられて驚いたらしく、ララは僅かに肩を震わせて振り返った。

そして、小刻みに首を横に振って否定する。

「そうか。それなら、これがやってみたいのか？」

ハイクはララの目線に合わせて腰を落とし、そう訊ねてみた。

ララはちらりとクレーンゲームのケースに物欲しげな視線を送ったが、即座に同じ動作で否定する。

（まったく。人の部屋に押し掛けるほどの図々しさと行動力を持っているかと思えば、この程度のことに遠慮する。さっぱり傾向が掴めないな。子供は単純ゆえに複雑だ）

そんなつまらない感想を抱くハイクにとって、クレーンゲームとは未知の機械である。

しかし世界旅行の意義を見出すなら、こうした新しいものに触れることが一番だ。

「分かった。それなら俺がやってみるとしよう。ララ、あの黒い猫のぬいぐるみをターゲットにする。俺はボタン操作を担当するから、奥行きが距離が掴みにくい。そこでお前はケースの横からクレーンの動きを見張り、あのぬいぐるみの真上に到達する直前で、手を上げて合い図をくれ。できるな？」

すると、顔を俯かせていたララは打って変わり、表情を明るくして元気に頷いた。

「よし、作戦開始だ」

ハイクが立ち上がり、準備運動でもするかのように首の関節を鳴らしていると、

「私、アイスクリームでも買ってきましようか？」

「お前にしては気が利くな。頼んだ。ちなみに俺の分は必要ない。甘いものは苦手だ」

財布から硬貨を取り出し、サティに握らせる。

「了解ですよ。有言実行してきまーす」

たたと駆け足でアイスクリームを購入しに行ったサティを見送り、ハイクは珍しくニヤリと笑って、

「ララ、投資するからには何が何でも、あのぬいぐるみを取るから覚悟しろ」

二六回目の挑戦でようやく標的だった黒猫のぬいぐるみがクレインに掴まり、開口部に落ちた。

ララには内緒だが、ハイクが『視界の映像を脳内でスローモーションに書き換える瞳術』を行使して、慎重にクレーンを操作したからこそその結果だった。

それでもララは大喜びしてくれた。

ハイクは開口部から戦利品のぬいぐるみを取り出し、ララに手渡す。

「俺がこんなファンシーなぬいぐるみを持っても似合わない。お前が抱いていた方が断然可愛らしいだろう」

ララは言外に『良いの?』とハイクを見上げた。

本当にハイクが欲しがっているのだと思っていたらしい。

その反応でハイクは理解した。

彼女が欲していたのは景品ではなく、誰かとの思い出だったのだと。

よく見るとブサイクな造形をしている黒猫のぬいぐるみを、ララはまるで宝物のように両手で抱く。心の底から嬉しそうに。

ハイクはそれを大袈裟だと感じたが、彼女の気持ちを馬鹿らしいとは思わなかった。

「そう言えば、サティのやつ遅いな。どこまでアイスを買いに行っているんだ?」

一〇分は経過している。

アイスクリームの売店が外にあるのかもしれない。

サティを捜しに行くか、それともここで待つべきか、ハイクはしばし迷った。

携帯電話でも持っていれば容易に連絡がつくのだが、あいにく誰も所持していない。

この場を離れてしまった結果、擦れ違う可能性もある。

そうなると合流するのが面倒だ。

「ララ、少しサティを捜してくる。あそこのベンチに座って待つて

いてくれるか？」

ララはこくりと素直に頷いた。

「サティがここに帰ってきてても、俺を捜しにこなくて良いからな。すぐに戻る」

そう言い残して、ハイクは早歩きで店内を見て回った。

ずっとララを一人にしておくわけにもいかない。

ところどころにガラの悪そうな連中もいる。

金持ちの層だろうと貧困層だろうと、ああいった種類の人間はこの世界にもいるんだな、とハイクは思った。

（最悪、迷子の呼び出しをアナウンスするしかないか。部屋の鍵も三人分、俺が管理しているわけだしな）

舌打ちを鳴らしながらも、ハイクは休みなく前後左右に視線を配る。

『さあさあ、第八回「パーソナル・オンライン・ファンタジー」バトルロイヤルの参加者はまだまだ募集中です！ 優勝者には賞金とトロフィーの授与があります！ 腕に自信のあるファンタジスト、今すぐエントリーを！』

通りすがら、例の脳内オンラインゲームの一角が熱狂的に盛り上がっていた。

その人だかりの中心に道化じみた格好のスタッフが、マイクを片手に民衆を煽っている。

「本日限定のイベントを開催してるみたいですよう。参加者を一〇〇人まで募ってバトルロイヤルをやるそうで」

「へー、そうなのか。——って、サティ！？」

「とは言っても搭乗できる機械は一〇機までしかありませんから、各ブロックに分けて一〇人ずつ試合を行って篩にかけるトーナメント方式ですね。最後まで生き残った一人だけが、次のステージに進めるんです。その厳しい闘いに勝ち抜いた一〇人のプレイヤーが、優勝の座を巡ってさらなる死闘を繰り広げるわけですよう」

熟練者のように熟知り顔で解説するサティの右頬に、ハイクは咎

めの人差し指を突き刺してグリグリした。

「おい、ここで何をしてやがる。お前は一〇分以上も前にアイスを買に行っただろうが。得意の有言実行はどうした」

「長引くと判断しましてね。初心者が一発で取れるほどクレーンゲームは甘くないんですよ」

「未経験者のお前がクレーンゲームの何を知っている？」

「すぐに買って持って帰ってもアイスが溶けてしまっただろうと賢明な判断をした、私がここにいます」

サティの言う通りララは熱中していたが、それでもアイスをほったらかしてまで続行する必要もなかっただろう。

休憩を挟めば良かっただけの話だ。

「まあ、いい。あっちの方でララを一人にして待たせているから、もう行くぞ」

ハイクはサティの手を引っ張ろうとしたが、ふと道化スタッフの容姿が目にとまった。

「いや、待て。あいつは……」

双眸を細めて、イベントの進行役と思しき道化スタッフの青年を凝視する。

「どうかしたんですか？」

「ああ、やっぱりか。サティ、ちょっと待っている」

言うなりハイクは歩き出し、小指を立ててマイクを握る道化スタッフの青年に近づいた。

と、そのスタッフは驚いた顔でハイクを見返し、人懐っこい笑みも露に両手を広げた。

「あ、兄貴!？」

「よう、久しぶりだな。元気になっていたか？」

「ええ、それはもう! ばりばり働いてるツス!」

明らかに歳下のハイクに対し、道化スタッフの青年は表面上だけではない、心の底から敬いと親しみを込めた口調で言った。

「お前、ここで働いているのか？」

「はい、一生懸命働かせてもらってるツス！」

その道化スタッフの青年は、ハイクがマフィア時代に関わった人間だった。

かつては悪徳な詐欺グループのリーダーをやっていたが、高齢者相手に金銭を略奪するその活動が徐々に派手になってきたので、レッドアウトファミリーに目をつけられたのだ。

彼の詐欺グループは解散を余儀なくされ、それぞれが地方に散った。

のだが、なぜか彼だけは当分の間ハイクに忠誠心めいたものを見せて街に留まった。

その後、田舎にいる両親の容態が悪くなったとかで、引っ越したのだが。

あれ以降も、彼は改心して真面目に働き出していたようだ。

「ところで兄貴は、どうしてこの列車に乗ってるんスか？」

「慰安旅行といったところか」

青年は小首を傾げたが、彼はハイクが吸血鬼である事実までは知らない一般の人間なのだ。

ついでに『黒血病』のことを説明しても仕方ないと思い、言葉を濁したのである。

「それより、このゲームに参加するにはどうしたら良いんだ？ ー見は駄目なんだろう？」

「あ、それなら俺が招待します。そうすれば兄貴も登録できるツスよ」

「ありがたい話だが、登録したいのは俺の連れの方なんだ。できるか？」

「お安いご用ツス」

ハイクの役に立てるのがよほど嬉しいのか、彼はこの場を一度他のスタッフに任せて、プレイヤー登録用の機械端末の前まで案内してくれた。

ハイクは待機中のサティを手招きする。

「サティ、こいつの説明を聞いて登録するといい」

「え！？ できるんですか！？」

「プレイヤー登録はできる。だが、予約制だから一週間は待たないといけないんだろう？」

機械のタッチパネルを操作する道化に訊ねると、

「もし良かったら、今回のバトルロイヤルに参戦するッスか？」

「そう言えば、参加者募集中とか言ってたな。一週間待ちがいるくらい人気なのに集まってないのか？」

「実はまだなんスよ。募集スタート時に、古参の実力派プレイヤーのみが参加する変な雰囲気になってしまつて、まだ枠が空いてる状態なんス。こうなると、無駄に空気を読んだ中堅やルーキーは参加しにくいんスよね」

「そうか。それなら助力しよう。うちの空気読めない姫が参戦する」

「ありがたいッス」

「え、ちょ、……ひょつとして、空気読めない姫って私のことですか？」

「他に誰がいる」

「あのう……、やり込み度が半端なさそうな玄人たちの中心に、私はいきなり放り出されるんですか？ ゲームに飢えた野獣の檻へ？ 全裸に等しい可憐潔白な美少女の私が？」

「全裸だろうとフル装備だろうと構わないが、精一杯、孤軍奮闘してくれ。それじゃあ、サティを頼む。俺はもう一人の連れを迎えに行くから」

「了解ッス」

「ふ、ふふふ……いいでしょう。そこまで言うなら私は必ずや優勝して、あなたを見返してやりますよう。有言実行無言実行予言実行」

涙目になつて意味不明な言葉を口走っているサティの血走った目を無視して、ハイクは踵を返した。

ハイクが率先してサティのために働いたのは、彼女の信用を買う

ために他ならなかった。

信用とは金銭で会得できるものではない。

もしも金の力のみで誰かの信用を得たのだとしても、それは自分に付属する『財力の信用』を勝ち取ったに過ぎないのだ。

資本の失墜が到来した時に、痛いほど分かるだろう。

真心が介在しなければ、いくら大金を積んでも本当の意味で人の心は奪えないのだ。

だからハイクは、その信用を利用して、首尾良く次の駅で彼女たちを騙すのだ。

∞ ∞ ∞

巨大スクリーン上で踊る白き魔法使いの少女——サティ。

ステージは天空に浮かぶ巨大な城。

意外や意外、優勝してやると大言壮語を吐いた^{ダイクホース}初心者^が、決勝トーナメントに進出していた。

「あいつ、魔法の才能あるな」

観戦者たちの後方で、ハイクは苦笑いを湛えつつ呟いた。

空域はもはや、箒にまたがる新参者の支配下にあったのだ。

開戦早々古参者たちに目をつけられた、空気読めずの魔法少女サティは案の定、えげつない集中砲火を浴びて苦戦を強いられた。

体力ゲージも空になる寸前まで陥り、あわや万事休すかと誰もが思った。

ところがどっこい、天から与えられしサティの『呑み込みの早さ』が土壇場で覚醒し、恐ろしい勢いで挽回を始めた。

彼女はただ黙って攻撃を受けていたわけではないのだ。

あのゲームの闘い方を古参者たちの動きから次々と盗み、さらにアレンジを加えて自分のものになっている。

巨大スクリーンの前に群がる観客たちのボルテージがひと際強く、高く、大きく跳ね上がった。

一歩間違えれば阿鼻叫喚の絵図になりかねない熱気理由は単純。残りのプレイヤーが、ついに二人になったからだ。

サティの白き魔法使いと、謎の黒き魔法使い。

互いに体力ゲージは少ない。

魔法行使のためのポイントも、ほぼ同等の値を示している。

サティは天空を浮遊する城の庭園に下り立ち、黒き魔法使いと真正面から対敵した。

空を飛ぶのもタダではない。魔法行使ポイントを消費しなければならぬのだ。

サティは懐から三〇センチ程度の白い杖を取り出して構えた。

同じく黒き魔法使いも黒い杖を構える。

『白き雪の妖精たちよ、我が声に応えてここに息吹け——ホワイトアウトエディション！』

サティが白魔法の呪文を高らかに唱えると、たちまち周囲の天候がぐずり始めた。

ぶ厚い雲が天空に浮かぶ城に向かって、明らかに不自然な流れ方で集結し、突如として猛烈な吹雪を撒き散らす。

視界は真横に吹き荒ぶ暴風と雪で白に満ちた。

二人の姿が激しく霞む。

あつとう言う間に荒れ狂う雪が積もる。

サティは界限を自身の属性に染め、自身の能力を強化しようとしているのだ。

だが、それには黒き魔法使いも黙ってはいない。

『黒き雷鳴の言霊よ、雷神となりてここに轟け——ブラックアウトエディション！』

黒き魔法使いが対抗呪文を詠唱すると、天空の城を囲む雪雲が、徐々に黒く変色していき、やがては稲光を内包し始めた。

狂ったように稲妻の閃光を生む黒い雲は、強烈な雪を降らせることをやめて——轟音と共に雷を放つ。

それはまさに電光石火のごとく勢いでサティの頭上に直撃し、彼

女の残り少ない体力ゲージを瀕死一步手前まで削り取った。

今まさに白と黒の決着がつく時。

黒き魔法使いは、奇跡的に生き残った白き魔法使いに引導を渡すため、雪の中で麻痺状態となつて動けないサティに歩み寄った。

黒き魔法使いは、先程の大魔法で魔法行使ポイントを全て消費している。

近接格闘技でサティを仕留める気なのだろう。

と、そこでハイクは気がついた。

サティの魔法行使ポイントが減っている。

その値は、彼女が『吹雪の魔法』を使って消費した時点よりも、さらに減少しているのだ。

その視覚情報に黒き魔法使いも気がついたのか、途中で足を止めた。

プレイヤーには自身の体力ゲージの情報の他、対戦相手の体力ゲージなどのパラメータが視界に映るらしい。

そして――爆発は唐突に巻き起こった。

雪の中に埋もれるように横たわっていたサティの体が、風船みたいに膨れ上がって破裂したのだ。

同時、城のステージ全体を揺るがすほどの火力が、黒き魔法使いに襲いかかる。

ガードする間もない。

破壊の塊をまともに食らった黒き魔法使いは、進行方向とは逆に思いつ切り吹き飛ばされた。

そして雪の上をぶざまに転がった直後、黒き魔法使いの体力ゲージは底を尽き、その姿がエフェクト音と共に砕け散る。

数秒の間隙を挟み、爆心地から少し離れた雪の下より、ひょこつと頭を出した勝者の姿をスクリーン上に認めるなり、会場には怒涛の歓声が巻き起こった。

「自爆、だったのか？」

「……違っつスよ、兄貴」

巨大スクリーンに視線を射止めたまま、道化スタッフの青年は恐れ戦慄きながら言う。

「あの吹雪はサティの姐さんが、自らの分身と入れ替わるため、そして相手の魔法行使ポイントを消費させるためのトラップだったんすよ。爆発したのは囃の分身だったんす」

「だが、体力ゲージは減った。分身がダメージを負っても本体にフイードバックするの？」

「このゲームは、自分の攻撃でもダメージを食らうシステムになってるんす。たとえば間抜けな話なんすけど、自分が設置した罠でもひっかかるとダメージを負ったり」

「分身が雷撃を食らうタイミングに合わせ、自分で自分を殴ってダメージを負ったのか。確かにそうすることで、体力ゲージの減り具合は自身で調節できるな。相手の攻撃を食らうよりも安全だ」

相手の視界を一瞬だけ奪い、その隙に分身をその場に置いて、積もった雪の下に隠れる。

さらに相手が必殺技を使うように誘導し、魔法行使ポイントを使い果たさせる。

パラメータの視覚情報を利用して、相手に油断させたところを爆発。

「頭が弱そうに見えて実は策士か、あの女……」

「それでは兄貴、あつしは授賞式の進行がありますんで」

一礼して去って行く道化スタッフの先に、拍手喝采をもって外野から歓迎されるサティの姿があった。

彼女は卵型の機械から下りると、目を白黒させて周りを見渡したが、すぐにスター気取りになって、黄色い声に手を振っていた。

そんなサティの振る舞いを遠巻きに眺めながら、ハイクはララと苦笑を見合わせた。

ところ変わって、ゲームセンター内のアイスクリーム店。

賞金とトロフィーを抱えるサティは、上機嫌で列に並んでいた。

「はい、これどうぞ」

賞金が包まれた金一封を差し出されてもハイクは意味が分からず、サティの爽やかな瞳を見返した。

「お礼ですよ。この服とか、おいしいお食事とかの」

「もしかして、お前そのために？」

「単なる思いつきです。世話になりっぱなしなのは、社会人として情けませんよう」

ハイクは微苦笑をもらして肩をすくめた。

「案外、律儀なんだな。だが、それは受け取れない。それはお前のものだ。俺が受け取るのは野暮だろう。それが嫌なら当分は自分の生活資金にすればいい」

「それもそうですね。では、せめてここは私におごらせてください」

「だから、俺は甘いものは苦手だと言っただろう」

ハイクはうんざりとした様相で溜息をついて、

「その代わりに、自分とララの分を贅沢にすればいい。俺は少し手洗いに行ってくる」

「分かりました。あそこに座って食べてますからね」

サティは店に隣接するベンチを指差す。

ハイクは無言で頷き、そのまま列から外れてトイレに向かった。

（お礼、か）

歩きながらハイクは再び溜息を吐く。

（人の金を使いたいだけ使おうとする傲慢な奴かと思いきや、実はそうでもない……。頭が悪いかと思っていたが、悪知恵だけは働く……）

昼食の時はララの新たな一面を知ったが、今回はサティの新たな一面を垣間見た時間だった。

ハイクは化粧室マークを目で追いかけながら、二人の顔を想起する。

脳裏に思い出されるのは、どちらも無邪気な笑顔だった。

（まあ……悪い奴らではないが）

だからと言って、このままなし崩しに一緒に旅を続ける気はない。今日を含めて、あと三日の付き合いだ。

それまでなら紳士に接してもバチは当たらないだろう。

情が移らない程度に。

「あ、兄貴兄貴！」

ふと後ろから声をかけられた。

あの道化スタッフの青年だった。

彼はハイクの前まで駆け寄ると、膝に手について荒い息を吐いた。

「どうした？ そんなに息を切らして」

「あの、さっきは舞い上がってて忠告するのを忘れてたんすけど…

…」

「忠告？」

青年は乱れた呼吸も整え切らないまま、若干血の気が失せた顔色でハイクにこう告げた。

「サティさんの最後の対戦相手、ちょっとタチの悪い財閥の息子でして——」

ララとサティの手には、ボリウム満点のアイスクリームが握られていた。

ワッフルコーンの上にはそれぞれ味の違う球体が四種類、四段重ねになっている。

それをバランスよく落とさないように慎重にベンチまで運ぶ。

「ララちゃん、気をつけて下さいね。落とすのはもったいないですよ」

ぬいぐるみも小脇に抱えているララは緊張した面持ちで頷き、そろそろ小幅歩調で進んだ。

しかし、そこで予想外の出来事が発生する。

人狼の細胞をひく持ち前の五感から、ララはその物陰に人がいる

ことは知っていた。

しかしながら、彼らがその死角から出し抜けに姿を現すとは思っていなかったのだ。

ララはとっさに衝突を避けようとした。

だが、焦るあまり足元が絡まってしまった。

ララは前のめりになる形で転び、べちゃっという音に青ざめた。

「あーあー、これ、どうしてくれるのかな、君」

粘つくく野太い声に、ララは擦りむいた手のひらではなく、頭上に視線を向けた。

「見てよ、これ。新品の高級スーツがアイスでべつとべと」

そこには小太りした背の低い青年と、ガラの悪い金髪の男たちがいた。

小太りした青年は上質そうな白のスーツを着ている。

けれど、太い首から下げるスカルのアクセサリーや、脂っぽい十指に嵌め込むいかつい金の指輪が、衣服の高級感を台無しにしている。

そんな成金青年——ティーチーバーロックを取り巻く目つきの悪い者たちは、タンクトップにジーンズというラフな格好だった。

皆、剥き出しの腕に畏怖の入れ墨が走っている。

「おいおい、人様にぶつかっておいて謝罪の一つもないぜ、このガキ」

「こりゃ弁償だな、弁償」

「勘弁してやれよ、まだ子供だぜ？」

金髪の男たちが卑下た笑いを含みながら同調すると、

「いいや、ダメだね。僕は子供も大人も女も男も差別も区別もしない平等主義者なの」

ティーチはにやついた顔で、ララを見下した。

すかさずサティが間に割って入る。

彼女はティーチにおずおずと金一封を差し出しながら、こう申し出た。

「あの、これで勘弁してもらえないでしょうか。あと、彼女は口がきけないんです」

「ああ、君は確かさつき僕と健闘した白い魔法使いさんかな？」

あたかも初めてサティの存在を認識したかのように、青年は下品な目つきで彼女の全身を舐めまわした。

「はい。その、この賞金で弁償は足りるでしょうか」

「はっ、そんなはした金で」

そう言いながらも、青年はサティの手から金一封を乱暴にぶんどり、封を破ってマネーカードを取り出した。

そのカードに記載されている金額を見て、彼は鼻で笑い、

「ああ、まあ良いよ。これで。大した額じゃないけど、僕は優しいからね」

中身が空になった金一封を手のひらから落として捨てる。

「でも、次は許さないからね」

まるでスーツを汚した件とは別のことに對して釘を刺すように、冷徹に言い残して彼らは去って行った。

果たして、ララが大粒の涙を流していた。

「し、仕方ありませんよう。ララちゃんだって、わざとぶつかっただけではないのですし、あれ以上を要求されなかっただけ良かったと思いますよう」

思いつ切りやせ我慢で捻り出した言葉だった。

サティだって内心は恐かった。

それでも、ララの方が思いをしたに決まっている。

彼女を慰められるのは、この場では自分しかないのだ。

（さっきの人、確か黒き魔法使いさんでした。私に倒されたのが、よっぽど悔しかったのでしょうか）

「大丈夫ですよ。私が迂闊だったんです。新参者の私が調子にのって、彼のプライドを傷つけてしまったんです。原因は私にあるんです。ララちゃんは何も気にすることはありませんから」

サティは精一杯の優しい声を操って、ララの頭を撫でた。

「ハイクにはあの人うつかりな私がどこかで落としちゃったことにして、謝りますよう。このことは秘密にするんですよ？　女同士の約束です」

けれど、ララは首を横に振って強く否定した。
そのオッドアイがサティの背後に向けられる。

「何でお前が俺に謝る必要があるんだ？」

サティの背筋が固まる。

ぎこちなく振り返ると、そこにハイクがいた。
何故か両手にアイスクリームを持っている。

「え、えつと……あの、賞金のことなんですが……」

「落としたんだってな」

「うつ……」

ハイクは足元に落ちている金一封を堂々と無視して、

「だったら俺が拾いに行つてやる」

「え？」

「きつと心優しい誰かさんが拾ってくれているだろうからな。そんな優しい連中に、わざわざ遺失物届けの手間を取らせるのは忍びないだろう？」

ハイクはサティとララにアイスクリームを手渡してから、彼女たちの背を強引に押して、ベンチに座らせる。

「ここでアイスクリームでも舐めて待っている」

∞ ∞ ∞

「それにしても空気の読めない馬鹿もいたもんだよね。ルーキーのくせにさ。ま、僕が手加減してやったことにも気づかないくらい鈍感で、ヒーロー気取りなんだから救いようがないよ」

小太りの白スーツ青年ティーチの言動は、もはや誇りでも何でもない。
ない。

全力で闘い合った結果、たとえ負けたとしても相手に素直な賞賛

を与えないばかりか、自身の未熟ささえ認めず、あるうことが現実で報復を決行するなど、単なる甘えん坊だ。

虚栄で見た目を肥やした中身のない矜持。

取り巻きの者たちはそれを理解していたが、口に出さない。

ティーチが恐いからではなかった。

彼が財閥の御曹司で、吐いて捨てるほどの金を持っているからだ。それ以外にティーチと一緒にいる理由があるはずもない。

そんな単純な論理にも至らず、ティーチは王様にでもなった気分です。バツティングセンターの一角を陣取っていた。

他の旅客たちは彼らを恐れてこの縄張りには近づかない。

はずなのに、

「おい、何だ、てめえは」

仲間の一人が威圧的な声を入り口に向けて放った。

見ると、そこには一人の少年が立っていた。

くせつばい黒髪に、漆黒の眼球。

色は白くても比較的健康な肌。

年齢は一七くらいだが、顔立ちはそれより若干大人びている。

「いや、何。ちよつと頭の悪そうなお前たちに確認したいことがあるってな」

「ハア？ てめえ、ふざけてんのか」

「Mなの？ よーし、分かった。お兄さんたちがこれでもかかってくらいボコつてあげるよ」

取り巻きの連中が一斉に少年に歩み寄る。

数という暴力が鋭さをもって一点に集中する。

ところが、少年の顔に恐怖の色は浮かばなかった。

ティーチの期待した通りの、怖気づく気配は窺えなかった。

案に違い、あるべき反応がなく、ティーチが眉をひそめていると、
「……低俗だな。サティでももう少しマシな会話のキャッチボールくらいはできる」

「おい、聞いたか？ 今コイツ明らかに俺たちのこと馬鹿にしたよ

な」

「ああ、したした。すっげー見下された気分」

「リンチだ、リンチ。暴力沙汰になっても、ティーチの親父さんが金と権力でものを言わせてもみ消してくれるからな」

そんな脅し文句を耳にしても少年は表情を波立てず、ポケットから『スタッフ専用』の黄色いシールが貼られた携帯電話を取り出して、ディスプレイを男たちに向けた。

「ここに監視カメラから映像データを転送した証拠がある。黒き魔法使いと、そのお仲間たちが、タイミングを見計らってとある少女にぶつかり、それに因縁をつけて白き魔法使いから賞金を略奪した映像がな」

「ああ、てめえあの嬢ちゃんたちの……何だあ、王子様でも気取って取り返しにきたってのかよ」

「マジで格好つけんなって、おい。半端な正義感出したってダサイ結果に終わるだけだぜ」

言いながら、日に焼けた肌の金髪男が一步前に踏み出して、少年に殴りかかった。

彼にはボクシング経験があり、この集団で最も喧嘩慣れしている男だ。

その男の見事な右フックが少年の顔面に叩き込まれる。

——その寸前。

「残念だが、俺の行動は正義感でもなければ偽善でもない」

ティーチ「バーロックは確かに見た。」

「真っ赤な悪意だ」

その少年の双眸が、妖しげな朱色に染まっているのを。

「……………ほんとつ、心の底からすみませんでしたッ!!」「……………これほど猛省する誠意の表れ方は他にないだろう、というくらい
の金髪男たちによる渾身の土下座が、サティとララの目の前にずら

りと並んだ。

他の客がなにごとかと視線を向けてくる。

顔を腫らしたチンピラ風情の男たちの後頭部に、二人の少女は戸惑いながらハイクに目をやった。

「賞金を取り返した。見ての通り、こいつらも反省しているようだから許してやってくれないか？」

ハイクが眠たげに言うと、サティは自身の背中に隠れているララに、

「え、えつと、どうしますか、ララちゃん」

いきなり選択権をゆだねられたララは、許しを請う男たちの後頭部を見ながら、コクコクと小さく二度頷いた。

「ララちゃんがそういうのでしたら、私も許します」

「だそうだ。よかったな、お前ら」

ハイクが額を床につけたままのチンピラたちに言うと、ガバツと金髪たちは一斉に顔を上げて、滝のような涙を流しつつ、

「……はい！ お手数かけて申し訳ありませんっした！」「……」

「

「わたくし共も改心し、これから世のため人のため生きてゆこうと思います、兄貴！」

「良い心がけだ。陰ながら応援している」

「あざっす！ よーし、そうと決まれば早速ティーチの野郎にボランティア団体を結成させるぞ。つーか、あいつどこ行きやがった？」

「兄貴に恐れをなして『パパー』とか叫びながら半泣きで逃げたぜ」

「あいつこそ姐さんたちに謝罪させるべきだ！ 今すぐ拘束して頭を下げさせよう！」

結託した彼らを啞然と見つめるサティとララ。

ちなみに姐さんとは、この二人のことだ。

「……では、兄貴！ わたくしどもはこれにて失礼いたしやす！ 何かご用があれば、いつでも呼んで下さい！ 微力ながら兄貴

「――」

「あー、もう分かったから行け」

しっしっ、とハイクは鬱陶しそうに手のひらを振る。

腰を綺麗な九〇度に折って去るチンピラたちを、サティは見送りつつ、

「激しい忠誠心でしたね。もしや吸血でもしたんですか？ 彼らの頬とか腫れてましたけど、あんな痛々しい吸血マークが残るものなんでしょうか。てゆうか、普通首筋にするものじゃないんですか？ いや、それ以前にほっぺたって、もう吸血じゃなくて単なるキスじゃないですか。あれはキスマークですか」

何を想像しているのか、サティは自身の体を抱くように腕を回し青ざめていた。

「アホか。ちよつと現実の恐さを教え込んだだけだ」

「男が男の頬にキス。確かに恐ろしい現実です……。しかし！ 私はあるあなたの趣味にとやかく言うつもりはありません。受け入れる努力もしてみよう」

「あれは俺が殴った傷跡だつ。見ろ、お前が頭の悪い憶測なんかするから、ララの視線が痛いだろう」

ララはサティの本気かどうか分からない勘違いを信じてしまつたらしく、泣き出しそうな顔でハイクを見上げていた。

この子にはまだ真と偽を見破る力がないらしい。

ハイクはララの目線に合わせて膝を下り、言い含めるような口調で誤解を解きにかかった。

「あのな、ララ。あまりサティのでたらめな言葉を信じるな。俺は

――」

なぜだろう。

そんなつもりはなかったのに、口は滑ってしまった。

「―― お前みたいな美人が好みだ。決して同性愛者ではないから、そんな顔で俺を見つめないでくれ」

瞬間、ララの頬が紅潮した。

子供に対するお世辞のつもりで発言したつもりだったのだが、予想以上に効き目があったらしく、彼女は照れて顔をぬいぐるみに埋めてしまった。

ララは可愛らしいが、その意味は違うし、幼女に手を出すほどハイクも飢えていない。

「ロリコンだったんですね」

心臓を突き刺すアイスピックのようなサティの一言。

一難去ってまた一難。

ハイクの同性愛者疑惑は、ロリコン疑惑へとシフトする。

∞ ∞ ∞

「…ボス」

「これか、私宛てに届いたという謎の宅配物は。でかいな。中身は？ まさか時限式の爆弾じゃないだろうな」

「いえ、私の瞳術で透視したところ危険物ではありませんでした。ですが……」

「配送元は？」

「不明です。レナードファミリー でしょうか？」

「さあな」

「中身、見ますか？」

「ま、臭いで分かるが、一応確認しておくか。どれ……」
「……」

「ハッ、なるほど。悪趣味なプレゼントだな。私を死体愛好者か何かと勘違いしてないか？ ご丁寧に折りたたみやがって」

「処理の方はどういたしますか」

「そうだな、手厚く埋葬してやれ。神父も手配しろ。こいつは私の知り合いなんだ」

「え？」

「野暮つたい眼鏡と、このイカれた服装。見間違えようがない」

「ボスのご友人、ですか？」

「そんなところだ。どこか憎めない奴だった。……ふん、気に食わないな。これで決まったよ。私はこれから兄上の列車を追いかける。留守の間、事務所はお前たち幹部に任せた」

「それは構いませんが、レナードファミリーのところではなく、ハイク様のところへですか？」

「ああ、そうだ。ヒカゲに手の空いてる連中を五〇人ばかり集めて、対人狼武装の準備を整えるように伝えろ。すぐに『赤煉瓦の街』に飛ぶぞ、とな」

「し、しかし」

「ボスの緊急絶対命令だと言えいい。最優先事項だ」

「……了解」

「さて、兄上に迫る危険をさらつと華麗に排除するか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6132z/>

【キセキ＝シリーズ】

2011年12月21日15時58分発行